

土 淨

號 月 七



昭和十年五月廿日第三種郵便
昭和十七年六月廿日印刷
昭和十七年七月一日發行

第八卷 第七號

陸海軍 慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せずこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓五十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

中村辨康著

日常勤行式講讀

信仰の入門書！

座右に備へて日常

勤行の深意を味得

し、以て各自の修養に最適です！

毎日お勤めをするお經文の一々に懇切

な解説がついてゐます。即ちお經文に

和譯と意譯をあげて字解までつけ信仰

の深底を縷々述べられてゐます。

誰にてもよく判る佛教書！

一讀して信仰の何なるかを解

し得る絶好の書です。

B 6 版二百四十頁
價 一圓五十錢
送料 十二錢

著 夫 幹 本 山

想思體國がわと教佛然法

わが國體思想からみた

法然佛教の新しい基礎づけ

神國日本の教法として開創された

法然佛教を歴史的に解明した時局

下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つ

て初めて萬民翼賛の教法として現

れ大成されるまでを總ゆる資料に

より解明されてゐる。

わが國ならてはと思はしめる新宗

の開創の根源

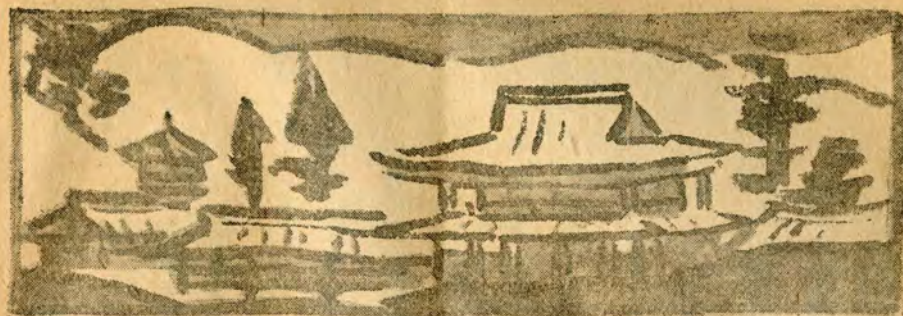
を説いて餘り

なし。

A 5 型クローズ装
價 二圓二十錢
送料 十五錢

振替東京芝區公明會館
番七八一二八東京

發行所 法然上人鑽仰會



浄土七月號 目次

表紙・扉・目次カット

中島 保

飾る生き方と磨く生き方

梅原真隆 (一四)

聖典
講義

九軍神の證り

大野法道 (一四)

生死の問題

吉田絃二郎 (一四)

生活の歡喜

戸松學瑛 (一六)

興亞の女性へ 一條の道を進む

山田わか (一四)

隨筆 おがむ強さ

後藤真雄 (一八)

孟蘭盆會を迎へて
會のたより

岩井前總裁上人遷化さる
與謝野品子先生小傳 (一五)
(一七)

ハワイの思ひ出

福田闌正 (一六)

縄跳運動の指導

出口林次郎 (一六)

▼信 仰 相 談

中村辨康 (一四)

創作給仕の一日

酒井菊一郎 (一六)

歌 俳 壇

お休み所
漫畫 協 團 (一四)

公 益 に 倒 る
奪 取 難 い 金
曝 書 の 心 得 (一三)
(一四)
(一五)
(一六)
(一七)

法 語 解 説
た だ 弘 願 に 隨 順 す る の み

中 村 辨 康 (一五)

編 輯 後 記

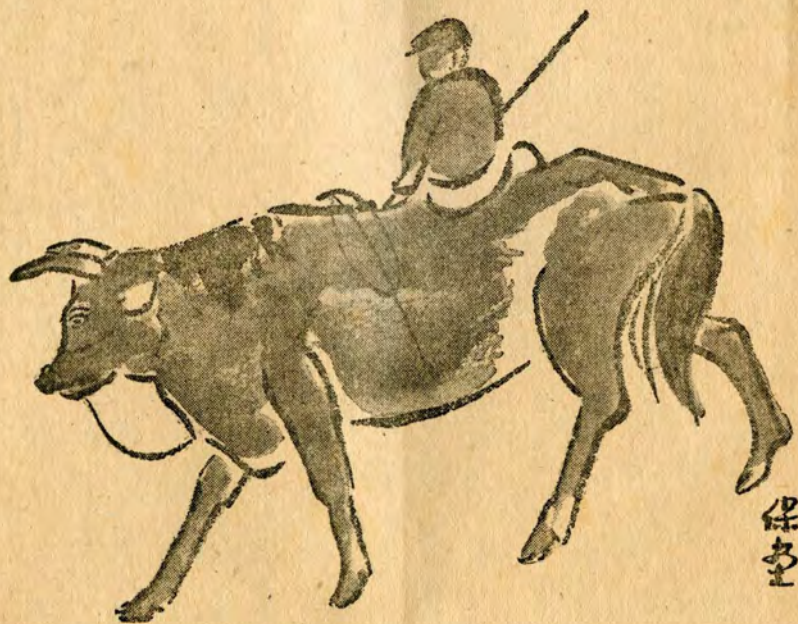
(一五)

淨土

七月號

たとひ七八十のよはひを期すとも、
おもへば夢のごとし、いはんや老
少不定なれば、いつをかぎりとお
もふべからず。さらに後を期する
心あるべからず。ただ一すちに念
佛すべし。

法然上人御法語



保老



生 死 の 問 題

吉 田 絃 二 郎

生死といふ問題はわたくしどもの念頭から一刻も離れることのできないものであるが、生と死と二つに分けて考へることがすでに間違つてゐるのかも知れない。生死といふことを氣にしたり、苦にしたりする原因はこの生と死を二つに別けて考へるところから生まれてゐる。もし生死一如といふ諦觀に徹してをれば生死を苦にすることはない筈である。

さてかくはつきり論理的に片付けてしまへば悟りも、諦めも雑作もないやうに思はれるが、人間生死の境を出づるといふことはなか／＼容易ではあるまい。思ひ餘つた今自殺をしようと思ふ人でも生死に迷ふであらう。

高僧傳などを讀んで見ても臨終に涙を流してをられる上人もある。これが眞實な人間の心であらう。

生死一如と觀じて、わたくしどもが知つてゐる世界、觸れてゐる世界は現在の生のみである。死の世界がどんなにありがたい世界であらうとも、生の世界の執着はさう易々と切り離すことはできぬ。ただ一夜の宿をもとめたかりそめの旅の宿さへなかなか離愁といふものはある。ましてや妻子ある人、親子兄弟ある人たちが世を去るとなれば、生死一如の諦悟は容易なことではあるまい。

わたくしの家に人を見ては吠ゆる狗子がゐる。わたくしにとつては執着である。もしわたくしの死後誰れにも恐れられ、嫌はれ、野犬ともなるであらうと思へばひとしほふびんになる。



しかし迷ひは迷ひである。悟りは見出さなければならぬ。

夏が來るごとにわたくしは睡蓮の花を思ふ。夏の朝早く露を踏んで池のほとりに佇んで、靜かに開いてゆく睡蓮の花をながめてゐるのは、すがすがしいものである。

睡蓮の花は濁つた池の水の上にぽつかり浮き上つて美しい花を見せてゐる。

人生の現實といふものもいはゞ水面にあらはれてゐる睡蓮の花見たいなものではあるまいか。そして水面下に隠れてゐるものこそ、死の世界、或は生まれなかつた以前の世界と見ることはできないであらうか。

わたくしどもは水の上の花を知つてゐるが、水の底の睡蓮の根を知らない。

睡蓮の花は水面上の現實である。しかし水の底深く大地に連らなつてゐる根そのものなしに存在することはできない。

花は生である。根は死である。

花は根から生まれ、散つて根に還る。

生は死から生まれ、やがてふたゝび死に還る。生は旅である。死は故郷である。死こそ生命そのものである。

わたくしは夏が來るごとに睡蓮の花を見てはかく思ふ。

花の現實は短かい。しかし花の現實を尊ばなければならぬ。花にとつては花として咲きほこる短かい刹那の現實のみが、恵まれたる機縁である。幾劫億の時を通じて賦へられた唯一の機縁である。尊い機縁である。

水の上の睡蓮はできるだけ多くの太陽を吸収しなければならぬ。できるだけ多くの新鮮な空氣を呼吸しなければならぬ。そのためにはできるだけ廣く花瓣をひろげて現實の生を生きてゆかなければならぬ。さすれば花が散つた時、水底の根は一層太く、一層強く生きのびてゆく力を貯へることができであらう。

人生は短かい。死は永遠であり、永遠のいのちである。

しかもこの人生を最も深く、最も強く、最も高く



生きたる者の死のみが尊く永遠のいのちにかゞやくであらう。

現實の人生は短い。しかし現實の人生の一日一日を尊く生きなければならぬ。死がわたくしどもを待つ時、心靜かに還りゆくために。

睡蓮の花のいのちは短い。しかし一片の花も大切に守つてやらなければならぬ。死が美しい睡蓮の花を誘ふ時、未練氣なく散らしてやるために。

×

柚子の花の咲くころになればいろいろの毛蟲や烏鰂が庭の木にたかつて、時々客人たちを驚かすことがある。馴れてゐてもあまりよい氣持ちはしない。數日前友人の令息が使ひに見えて、柚子の木に這つてゐる大きな烏鰂を發見し「これはよいおみやげができました」と大喜びで、竹の皮に包んで數匹持ちかへつた。

中學の二年生である。同級の友人たちへも分けてやり、みんなでその烏鰂を飼つて、揚羽の蝶にするのだといふことであつた。

その烏鰂は二三寸の大ききで、頭が非常に大きく全體は濃い草色であり、棒切れで突つくと、火のやうな赤い二本の舌見たいなものを出した。無氣味さは蛇の舌を聯想させた。いかにも怪奇的な蟲であるが、その色彩から見て、見事な揚羽の蝶になるであらう。

嬉々として竹の皮に包んだ烏鰂を携へて行く少年を見てわたくしは考へた。自然によつて創造せられたるものにひとつとして醜いものはない。それを善とし悪とするのは人間の小さい我である。

地を這ひ醜いと思ゆるものもやがては天上を翔る天女のごとき揚羽の蝶となる。

また夏になれば竹藪のあたりから大きな青大將がやつて來ることがある。六尺を越してゐる。去年までは青大將が出るごとに近所の若者に頼んで捨てさせたが、その若者は召されて戦地に行つたので、わたくし自身青大將を追はねばならぬ。

青大將は薔薇の蔓に絡み、樺の椎の梢から梢を傳ひ、硝子窓に這ふ。

わたくしは少年に青大將の話をした。そしたら少



年は「うらやましいなあ」と歎聲を洩らし「僕、蛇は大好きです。僕も蛇の来るやうな家に住みたい」と言つた。

わたくしはまたしても少年に教へられた。

人竇を避け、静寂の地を求めようとすれば必ず野猪毒蛇の棲家を覺悟しなければならぬ。昔の上人達にとつては野猪も毒蛇も友であつた。

「娘だつて滅多に食ひつくものではありません」と少年は言つた。わたくしは狼さへ馴れたといふ少年アシシのフランススを、この少年のかぐやく瞳に見た。

×

相當名人の域に達した武藝者たちは睨んだばかりで天井裏の鼠の騒ぎをびたりと留めることができるらしい。山岡鐵舟居士の門下にはそんな人がゐたと聞く。

ところで狂言作者の河竹默阿彌翁の家ではどんなに鼠があばれても殺さなかつた。そして毎晩やすむ前に臺所の片隅に小皿に飯を入れたものを置いてや

つた。鼠はおとなしくなつて、決して臺所を荒らさなくなつた。河竹家の人に直接聞いた話である。默阿彌翁らしいゆかしい話である。

陸海軍病院 慰問淨土

寄附者芳名 (敬稱略)

- | | | |
|-------|-----------------|-------|
| 一圓五十錢 | 松江市寺町誓願寺 | 佐藤學禪 |
| 三圓 | 大阪市港區九條中通リ二ノ一五七 | 岩橋澄現 |
| 一圓五十錢 | 浦和市本太町一二二三 | 瀧川信雄 |
| 一圓二十錢 | 和歌山縣海草郡紀三井寺 | 松尾察道 |
| 六十錢 | 大阪府泉南郡尾崎町 | 池田フサ |
| 一圓廿五錢 | 青森縣五所川町字川端町 | 願昌寺 |
| 十圓 | 別府市鶴見園 | 笠置正人 |
| 一圓二十錢 | 茨城縣稻敷郡阿見村阿見 | 加藤登志 |
| 一圓二十錢 | 兵庫縣赤穂郡赤穂町 | 津村久太郎 |
| 二圓 | 滋賀縣水口町新城 | 永福寺 |
| 二圓 | 福岡縣朝倉郡比良松 | 淨福寺 |
| 三圓 | 京城府上住十里町四二七 | 古武かつ |



おがむ強さ

後 藤 眞 雄

○ 日 本 語 を 知 る

全く不用意に北支へ渡つた時、私の一番困つた事は言葉が通じない事だつた。尤も支那は日本の指導下に入つたんだ、日本語がわからなくなつて困るのなら支那人が困れば良い、日本人はどこへ行つても日本語で通せば良いのだ。然しこれは私の勝手な理屈にすぎなかつたのである。

實際に支那に渡つて見ると、何と云つても支那人が多いのだから、郷に入つては郷に従へで、やはり支那語でなければ何としても日用の便を缺く。手まね足まねで少しは用がたりるが、大骨が折れる。泥まみれになつた靴を支那人のボーイに磨かせ様と思つて、靴磨きの眞似をして見せてたのんだ處が、どうしても通じない。漸く合點したから、わかつたのかと思つたら、いつまでたつても靴は磨いてくれないで、かはりにお風呂をたてられたのには閉口した。私の靴磨きの手眞似が入浴を希望してゐる姿とうけとられたらしい。

こんな失敗、滑稽を何度か繰返す間に、私の様なものでも少しは支那語が云へる様になつた。いさゝか得意になつて洋車を値切つたり、煙草を買つたりした事である。

一日支那人が大勢で日本語を習つてゐる處を見學した。その時一言二言、支那語の單語を知つた私は支那人の中のおとなしうな一人をつかまへて

「チーハンラマ」とやつて見た。處がその支那人は不思議さうな顔をして私を見乍ら、

「ワタシ、マダ、ソナニホンゴナライマセン」

といとも鮮かに日本語で云はれてしまつたのである。私は全く赤い顔をしなわけにはいかなかつた。

私はいつの間にか、然も何の苦勞もなしに日本語を語り、日本人の間では誰からも決して私の言葉がわからないと云はれた事は一度もない。

苦勞して、苦心して話す支那語も支那人の耳には日本語としてうけとれるらしい。

芝中の二年の時だつたか、御成門の處で外人に話しかけられた事がある。

「銀座へ行くのにこの電車に乗つて良いのか」と云ふのである。

私は丁度其の日、英作文で習つたばかりの間ひであつたので、自分では大いに鮮かなつもりで、英語でボツ／＼と銀座へ行く道を教へた。外人は笑ひ乍ら「アリガト」と云つて電車に乗つて行つた。

實の處、私は大いに得意だつた。然し良く考へて見ると外人の間ひが實に良く私にわかつたことである。

わかる筈である、その外人は鮮かな日本語で私に質問したのである。それを私は一生懸命に英語で答へてゐたのである。初めて外人に話しかけられたトタンにのぼせ上つた私はそれが日本語か英語かわからなかつた。外人だから、きつと英語だつたと思つたらしい。思ひ出すと今でも苦笑することである。

いづれにしても、結構私は世界各國語の中で日本語が一番上手に話せるのである。と云ふよりも、實の處私には日本語しか話せないのである。

毎日何人か必ず話し合ふ私達は何と日本語が上手なことだらうか、日本語で嬉しいこともかなしいことも、おこつたり、笑つたり、何でも日本語でやつてのける。こんな上手に日本語が話せると自分で氣のついてゐる日本人が一體何人あるだらうか。

○ 無 宗 教

「私は何の宗教も信じてはゐませんヨ」

特に若い人達は何も信じておらぬことを誇りとしてゐる様である。何度かこんなことを聞かされる。

「私の家は淨土宗なんですがネ、私は別に何宗と云ふ譯はないんですヨ、唯喜提所が淨土宗でしてネ」

いかにも念佛も申した事のない様な事を云ふ人が随分ある。然し實際は日本人が日本語の上手な事に氣のつかない様に、その實深い

念佛の信仰の中に幸福に生活してゐる事に氣のつかない人が多いのである。

幸ひにして私は、外人に話しかけられたり、支那で失敗したりしたお蔭で日本語の話せる事をさつた様に私自身は何度か出合つた不幸な出来事の爲に、根強い念佛信者であることを知つてゐる。

淨土宗の寺に生れ、寺で育てられた私が念佛を申すことは當然過ぎる程當然のことに考へられるかも知れない。然し俗に云ふ、こやの白粉で少しなまいきになつて來た十六七の頃は寺に生れた事を苦情云つて見たり、念佛なぞ申すものか等と師父をいやがらせたものである。

魔が大正の大震災の起つたのは丁度その頃だつたのである。十人の家族の内七人迄その時失つた位であつたのだから、その災が私の家に大きかつた事は事實である。

私は八方火に圍まれて、狭い川の中の小きな舟の中で一心不亂に念佛を申してゐたのである。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、なまいき盛りの私は全く眞剣に、熱心に、大きな聲を出して、然も誰にもすゝめられた譯でもなく、教へられたわけでもなく、唯夢中で稱へに稱へたのである。

勿論其の當時私は淨土宗の宗義も稱名の意義も何にも知らなかつたのである。然し唯念佛を稱へたのである。

其の時の氣持は念佛をとなへたら今眼の前に燃へて來てゐる火が

消えると思つたかも知れない。いのちが助かる様にと願ふ氣持が念佛となつたかも知れない。或は今現前のこの焦熱地獄の底から欣求淨土の氣持で稱へたのかも知れない。

今日になつて見ると其の時どんな氣持で念佛を申したのかはつきり思ひ起せない、が然し念佛を申した事だけははつきりおぼえてゐる。決して題目も唱へなかつたし、十字を切つたおぼえもない。

正直な處、其後と雖も時に觸れ、折に觸れやはり口に出て來るのは念佛である。實際に眞の底まで沁み込んでゐる宗教心は一代や二代で出来上つてゐるものではない。

「私の家は昔から淨土宗で……」と云ふ人の體の奥底には淨土宗の精神が満ちみちてゐる。唯それを強く自分が意識してゐるか、ゐないかの違ひである。丁度健康體の人が自らの心臓や肺臓の存在を意識しない様なものである。

○ 日本人の宗教

日本人は佛教徒である事が本當であり乍ら、然も世界中誰から見られても佛教徒であると云はれ乍ら、その實、當の御本人は本當に自分は佛教徒なのだらうかと疑つてゐる。

實際は自分で佛教徒であるかどうか氣のつかない程、根強い、深い、然も健全なる佛教徒になり切つてゐるのである。丁度何の苦勞なしに知らず／＼立派に日本語を話してゐると同じ様なものの

ある。

例へば眞新しい一箇のコップをいたづらにたゞきわつてゐるのを
見たら、日本人である以上、勿體ないことをする、ひどいことをす

曝書の心得

からつと晴れた日に土用干をす
と普段みたこともない品々が縁
側から座敷までならぶので子供た
ちは大喜びである。幾條にも張ら
れた縄にきげられた着物の間をく
ぐつて跳び歩いてゐる。女の着物
をみて随分長いナアと感心するの
も子供たちである。
亭主は書棚から本を持ち出して
日に晒してゐる。未だ棚に澤山本
が残つてゐるのに一冊の古書を珍
しさに眺め始める。それもその
筈、貞原益軒の曝書の心得なのであ
る。その心得に曰く

「梅雨霽て後、書を日に晒すべ

し。新蔵をひろげ、表紙を下にし
て乾す。亭細に懸て晒さば表紙損
ず。天氣好日なりとも一日に一度
なるべし。朝より晒し、午未（正
午から二時まで）の時收む。晩に
は暴雨の憂あり、はやく收むべし。
屋下にならべて熱をさまし、一夜
置て明朝寄（書棚のこと）に納む。
凡書を晒す事、一度に多晒すべか
らず、暴雨のおそれあり、又多け
れば家奴厭ひ倦て心を用ひず書を
そこなふことあり。損壞あらば修
補し、斷たるとち綴を縫ひ縫ひて
各故のごとく櫝中に納む。各
其所を得せしめて蓋を閉べし。
屋中に久しく晒さんより、かくの
ごとく烈日に一度晒したるが蟲は
まず、濕なくしてよし。云々と

る」と差出がましく止めてまでしなくとも、不愉快な感じに顔を
ゆがめることだらう。そのコップの所有が何人に屬しておらうとも
その場合問題にはならない。

利害打算から割り出される不愉快さではない、例へ一箇
のコップたりとも因縁和合の姿とうけとつてゐるからであ
る。金さへ出せば手に入れることが出来ると云ふ簡單な考
へからはこの氣持は出てこない。一箇のコップたりとも立
派に形を整へて使へる様になるまでの苦勞に對して申譯な
いと考へるからである。神のおぼしめしに依つて存在した
コップを考へる日本人は恐らくないだらう。

その氣持こそが佛教徒なればこそ出て来る尊い氣持なの
である。

「ソナ事、佛教がなくともわかつてますヨ」と云つた
人もある。佛教に教へられたことすらわからなくなつてし
まつた程佛教徒になり切つてゐるのである。

日本人とは何ぞやと聞かれて、どう説明する事が一番わ
かり良いかに迷ふ様に、佛教徒であることを説明するのに
困る程實の處日本人は佛教徒になり切つてゐるのである。

○日本強さ

大東亞戦争が始まつて以來、日本のたてた武勳は今更こ

こに書き立てるまでもなく、良く讀者諸氏の知る處である。

今世界中は日本が何故こんなにも強いのだらうかと云ふ問題の解決に悩んでゐることだらう。勿論御稜威の然らしむる處、皇軍將兵の忠勇義烈なる御奮闘に依る處であることは言を俟たない。然しもう一步掘り下げて、その強さを考へて行くならば日本人は佛教徒だからと云ふ點に到着するだらう。

獨逸は科學的に研究して、日本人は味噌汁を食するから強いと考へた。成程大豆の中に含む蛋白質が肉の蛋白質と殆ど同質であることが發見されたにはちがひないが、日本人の強さが單に味噌汁に依つて解決されたのでは迷惑である。第一線に活躍する勇士達は進んで勇躍壯途についた人達はかりである。米國は水兵を募集するのに「太平洋艦隊に乗り組むと布哇とか、マニラとか異國情緒豊かな外國へ行ける、そこにはフラダンスをやる美人がゐて、お前達とダンスをしてくれる。サービスしてくれる……こんな意味、こんな筋で作り上げた映畫で募集した。」イン・ザ・ネービー」とか「ネービー・ブルー」などと云ふ映畫で水兵募集をやつたのである。

およそ日本の水兵諸士とは相違してゐる、この一事だけでも勝負はすदैについてゐる。

日本の軍人の中にこんな氣持の人が一人でもおるだらうか。日本は正義の爲に矛を取つた。日本の戦は聖戰である。正しきことの爲にこそ本當に生命をなげすめてゆく處はないのである。

正しきに身を投げ込む。これこそ「おがむ」信念である。五體を投じて禮拜する佛教のおがむことを知つてゐる人でこそなしうることである。換言すれば佛教によつて古くから「おがむ」ことを教へこまれ「おがむ」ことを善く知つてゐる國民なればこそ、正しきを正しきと見きわめ、一切を投げ切る強い宗教的な信念が湧然として起り得るのである。そこにこそ底しれない強さがある。

今日の戰爭が最も進んだ科學兵器なくして一刻も戦ひをなし得ないことは誰でも知つてゐる。然し米英は持てる兵器に最後の最後までを依存してゐる處に弱さがある。

日本の武器、兵器は頗る優秀なものであると聞く、勿論そうなくてはならぬ。然し最後のたのみは手にする武器ではない。この身、この體を「しこのみだて」と投げ出してゐる處に本當の強さがあり、それでこそ優秀なる兵器が本當の優秀さを發揮することが出来るのである。

この尊い精神は勿論、日本民族、神ながらにそなはつてゐる精神であらう。然し佛教が正しく「おがむ」ことを教へてくれ、「おがむ」いつけがいつの間にかこの尊い精神を磨きに磨き、そだてにそだてゝ來た事を考へるのである。

「おがむ」と云ふことが簡単に説明出来ない程しみ込んでゐる日本人にこそこの強さがある。銃前と云はず、銃後と云はず、私はしみじみとこの「おがむ強さ」を味はされてゐる。

孟蘭盆會を迎へて

孟蘭盆會は申すまでもなく年に一度祖先の靈を自分の家にお迎へして供養するといふ無上の善法であります。ですから家々ではお聖棚をつくり、それに枝豆、瓜、

茄子、蓮根等といった新鮮な野菜を供へ、香華をあげてお寺の坊さんをまねいて棚經をあげてもらいます。

特に今年は大東亜戦争下に於ける初めての孟蘭盆會であります。敵の蠢動する所にはたちまち皇軍の鐵槌がふり下され撃滅されてゆきます。五、五、三の比率をかさにきて日本をおどし屈伏させようとした彼等の暴慢は、正義と忠義にこり固まつた皇軍將兵の前に手も足も出せない醜態をさらしてあります。今や八紘一宇の肇國の大理想は詹々と實現せ

られて、その完遂も最近にあるのであります。生をこの聖代に享けて眼のあたりこの隆昌の有様をみることの出来るのは何たる幸せであります。

これ偏へに御威のしからしむるところであるのは申すまでもありませんが、赫々たる武功を立て陸に海に空に惜しくも華と散つた幾多の忠勇なる將兵の賜物でなければなりません。

捨身奉公は佛教の根本の信念であり修道の要諦であります。これら幾多の勇士が滅死奉公を身を以て實踐し、國家を磐石の泰きに置かれたのであります。銃後にあるものは常に再思三省し先づ英靈に對して供養を怠つてはいけません。

佛果の増上を希はねばなりません。

施餓鬼會

施餓鬼會は地獄に墮して飢餓に苦しめられてゐるものに供養する法會であります。つまり如來の大慈の施設によるものであつて、一般に亡靈供養のためにするものであります。この法會により施食をいたしますと、一ぱいの食物が變じて無量の飲食となり、そのおかげを以て一切の餓鬼等が食を得て苦を免れるとされてゐます。

また川等で水死した人達の供養を行ふのに

川施餓鬼があり、川の中に船を浮べて上下に操りながら精靈の戒名を書いた塔婆を流して回向いたします。川施餓鬼は流瀧頂といつてわが國獨特のもので、幡を水に流して無縁の亡者に回向することから始つたものです。





九軍神の證り

大野 法 道

數 佛 偈 講 義 …… 四 ……

—

深く諦かに善く
諸佛の法海を念じ
深を窮め奥を盡
して其涯底を極む

この一偈は佛徳の證である。證は「さとり」のことで、「覺り」とも書く。證りといふと、何となく六ヶしいものゝやうであり、まして佛の證りとあつては、吾々人間には考へて見やうもないほど遠いものゝやうに思はれるが、實を言へば證りにも種々ある。

砂糖を嘗めた人は、甘いといふことを知つてゐる。そこに一つの證りがある。甘い味覺から進んで、甘いといふの

は之だと、見開かれたのが證りである。つらい事や苦しい事に出遇ひながら、まず「自分の意志を強く固めて進む人」には、自然に忍苦の尊い證りが開かれてゆく。また苟くも日本人である以上、忠誠無比なる楠公父子の事績を知るとゝもに、必ず眞の日本人の姿をそこに見出しお國にさゝぐるわが身の覺悟の證りが湧くであらう。

かやうに證りにも種々あるが、いづれも經驗から來るものであつて、自分で見る事、聞く事、行ふ事、心の眼で見えてよく味はふ事などから證りは生れる。それ故、さとりは見た人、聞いた人、行つた人、心で味つた人だけが持つてゐるもので、それを他人に説き聞かせやうとしたり、そのまゝ譲り渡さうとしてもダメである。

例へば、甘い物を食つたり飲んだりしたことのない人が

あるとして、その人に、甘いといふことをイクラ説明しても、しつかりした會得はできぬ筈であるし、自分が砂糖を

前本會 總裁 岩井智海上人遷化さる



淨土宗前管長、本會前總裁岩井智海上人はかねて堺市自坊にて病氣御靜養中のところ遂に五月二十四日午前八時狭心症のため御年八十歳にして遷化遊ばされました。上人は文久二年五月二十七日に福岡縣糟屋郡山田村大字猪野河野三

郎氏の二男に生れ、福岡成道寺岩井境上人について得度されました。知恩院大學林、大阪市英和學會を終へてから立教大學に學び、音樂學校に提琴を修業しました。今でも上野の山を破れた粗衣に提琴を片手にかゝえた上人の姿は語り草の一つになつてゐます。昭和九年十月に淨土宗管長に就任して知恩院に御入山あり、本會が創設されてから初代總裁になりました。上人の一生は殆んど布教にさしげられ、日清戰爭にはわが國最初の從軍布教師となり、昭和十一年には建國殉國者慰靈のため鮮滿に布教されました。

嘗めて、他人に甘さを合點せよと言ふたとしたら、之ほど無理な註文はない如くである。

二

自分の證りは説明もできぬし、人にも譲れぬが、自分に取つては之ほど尊いものはない。

すべてわが身を生かす力となるからである。

辛苦に堪へぬいた人のもつ證りの玉は、いかなる窮狀に置かれても、はね返ることを知つてゐるし、永年の豊かな経験から醸しだされた證りは、事に當つて血迷ふやうなことをさせないからである。

たゞに窮狀や難關の場合ばかりではない。人間の日々の生活は、本を質せば、自分のもつ證りから出て來ないものは、一つとしてないのであるから、吾々はこの證りを、廣くし深くし、力強くするやうに心掛けねばならぬと思ふ。殊に大東亞共榮圈の建設といふ、前古未曾有の聖業を翼賛しまつる爲めには、先づ以てこの證りを研ぎ上げねばならない。この大なる建設の途上には、或は敵國のゲリラ戦術が加はつて、豫期せぬ難關に出遇ふこともあるかもしれぬし、或は人情風俗の異なる人々の中には、日本の眞意を汲

みとりかねて、意外な事を仕出來すものもないとは限らぬ。それらに對して、何よりも先きに立つものは、皇國日本人がもつ公明正大なる證りであらねばならぬ。

西洋と東洋との學問の異ひ目は、種々の方面から見ることができ、今の證りの問題から見れば、西洋の學問は知識を尊び、東洋のそれは證りを目ざしてゐる。西洋だと證りを全く知らぬわけではないが、ひたすら知識を重んじて、その精密擴張に専ら意を注いだから、各分科の學が非常に發達し、特に科學の進歩では、東洋よりも一歩先きへ行つた所があつた。之は東洋が負けたのではない。東洋では昔から知識を方便とし、更にその先きの魂の教育——證りの培養に重點を置いてゐたから、目のつけどころが異つてゐるのである。東洋の學問を見ると、證りの前衛にばかり氣を取られて、肝心の本陣の固めが不十分である。西洋の眼で東洋の學問を見たら、非科學的で客觀性が少ないと思はれるであらう。之は互に反省すべきことであるが、東洋としては、飽くまでも知識は前衛であつて、本來の證りの培養が、人間教育の根本要義なるを忘れてはならない

證りは他人に説明してもダメであり、不思議なことがある。證りから噴き出した生活事實を通すと、他人にもよく判るし、その證りに觸れたやうな心になるのである。

一例を、九軍神の證りに取つてみる。

大東亞戰爭の劈頭、布哇眞珠灣の開戦で世界の耳目を聳動せしめた、あの特別攻撃隊の岩佐中佐等の九軍神の武勳を見るが、何が九軍神をしてあゝしたすばらしい舉に出でしめたかと問へば、それは平素から持つてゐた證りと答へていふと思ふ。その證りは日本海軍の魂であり、常に大御心を仰ぎまつる強い自意識と、實戦さながらの猛訓練とによつて、磨きぬかれてゐたものである。その證りは平素九將士の心に奥ふかく、しかも生々として潜んでゐたが一旦あゝした場合に出遇ふと、時を遷さず、あのやうにすばらしい働きをさせるのである。この證りから噴き出した最高最上の生活事實を聞いた人は、それに依つて、その證りの尊とさがよく判るとともに、それが自分にまで乗り移つてくるほどの心にもなつたであらう。まことに九軍神の證りには、百世の下、日本人の魂を刺戟して、尊いさと

りを得させる力が満ちみちてゐるのである。

この頃發表された五月八日の、珊瑚海戰で空母二隻を

の他を撃沈した際、索敵機も亦同様である。廣い大海原に長時間にわたつて敵艦を求め、漸くにして探しあてた頃には、もはや油は残り少なくなつてゐた。基地へ歸る途中で味方の攻撃機に出會つた時、このまゝ歸つたなら、敵艦の在りかを知らぬ攻撃機はどうなる。惜しい敵を逃がしてしまふ。今はたゞ味方機を敵の所へ誘導せねばならぬと、一路その本務に突進し、目的を果した頃には既に油は盡きてゐた。

今ぞ最後と、敵艦めがけて體當りの壯烈なる自爆を遂げ、こゝに驚天動地の、海軍魂を發揚して遺漏なき生活事實を顯したのである。

珊瑚海々戰の、米英の膽を寒からしめた大戦果は、この索敵機の誘導に始まるを思ひ、しかも歸航の機首を誘導の方向に轉じたのは、やはり平素の證りからなるを思ひ、その誘導たるや、たゞに當時の攻撃機を導いたばかりでなく全日本軍を導くものであり、全日本人を導くものであり、未來永遠「御民われ」の榮えある證りを呼び起す導きとなるものであつて、いつまでも皇國日本とゝもに生きゆく、絶大なる力なるを思ふ時、その根本である飛行勇士平素の證りの偉大さがよく判るではないか。

四

さとりはよく考へてみると、個人的な自分だけのものではなく、もと人々に共通なものが自分々々に顯はれてくるのであつた。さればこそ、他人の證りが自分にもよく判る

黒谷法主望月信亨
大僧正名號付

佐藤玄隆編

和譯 佛說 父母恩重經

日常勤行 肉筆石版刷
食作法 付 折經本美本
過去帳

一般追善供養印施用に好適！

見本一部金五十錢（送料共）
十部以上御購入には割引します。

鹿兒島市易居町三二

發行所 不斷光院

振替鹿兒島四八四番

し、それを受け取つた心にもなるのである。

九軍神のさと、索敵機の勇士のさと、之らは別々のものではななくて、日露戦争の廣瀬中佐の證りであり、日本海々戦に乙信號を擧げた東郷元帥のさとであるのである。吾々は常にこの尊い證りを念じて、ますますそれに通ずるものを確かにし、いよいよそれを受ける心を磨かねばならぬ。

以上のことを胸に置いて、第五偈を讀むと判るであらう。佛の證りは人々に共通な、正しく生きぬく本となる法の體現であり、その深さと廣さが無限であるから海に譬へて「法海」と言ふ。それは言葉では説けぬが、證りから噴き出す行徳の生活事實を通して、吾々にもよく判るのであり、心で以て念すれば、それに觸れた心にもなれる。尊いものに通ずる道は、念することがたゞ一つあることまで顯はして、深く諦かに善く諸佛の法海を念じ」と言ふ。

しかもこの偈は、佛が佛のさとりを念じたまふことを説くので、人間ばかりが念するのでなく、佛もまた念じたまふ。といふのは佛のさとりは、いかなる佛にも共通で、三世諸佛のさとの傳統を念じ、それをわが身に受けとつてゆくのが佛だからである。いくら念じてをしまひになら

ぬから、「深を窮め奥を盡して其涯底を究む」である。この第五偈は佛の一般的證りを説いたのである。特に阿彌陀佛のさとりはと言へば、後に至つて委しく出るからそれにゆづる。

五

無明と欲と怒りと世尊は永くなし
佛徳を讀する結びに二偈ある中で、この半偈は佛には見られぬことを、次の一偈半は佛だけに見られることを説くのである。

佛には、人々がもつてゐるやうな「無明と欲と怒り」は見られない。普通には貪・瞋・癡と云ひ、人間の浅ましさを三つに分けるが、こゝでは無知の愚かさ、即ち智慧の明の缺けてゐる「無明」の癡が、すべての間違ひの本であるところから、最初に出したのである。「欲」は食欲で、執拗（しやくごう）といふ業欲、目先のものを取り遁がしてしまふ「怒り」は瞋（ちか）で、返つて大きいものを取り遁がしてしまふ。返つて腹を立て心がむつと強くなることで、そのために取り返しのかねること、損をすることが澤山ある。

これらの浅ましい姿が佛には見られぬから、「世尊は永く

なし」といひ、佛徳は、清らかに澄み切つた青空の如しと表はすのである。

しかし、こゝに注意すべきことがある。このやうに絶対の清らかさを以て佛を表はすのは、佛の一面には違ひないが、佛には更に他の相對の一面があるのを忘るべきではない。

もしたゞ絶対であつて、全く影のないだけのものとすれば、貪瞋癡に苦しむ人々から、佛は絶縁したものとなつてしまふ。

ごみくした地上の人々は、青空を高く仰いで、拭ひ去つた廣い心になれるから、そこにも一つの有難味はあるに違ひないが、佛はそのやうに知らぬ顔して、高い所に獨り自ら清しとするものではない。それどころか、發心修行の始めから、人々の貪瞋癡をどうするかを問題にして立ち上つたのであり、正覺成就の證りは、その問題を解決する鍵を握つたのであり、人々にこの證りの力を及ぼして、どこまでも生き活くるものが佛である。その慈悲の眼は絶えず衆界を見張るのであり、教化の手は常に人々の身にさしのべられてゐるばかりでなく、時には、人の心ともなり行ひともなつてまで、貪瞋癡から成り立つ世界に出勤されて

ゐるではないか。

人間界に入つて生活しつゝある佛であるからには、全く影のない透明體であるべき筈なく、やはり人間と同じやうに、佛でも貪瞋癡の形はあるに違ひないと思ふ。たゞ人間と異なる所は、人間のやうにその中に落ち込んで苦しんでゐるのではなく、尊い證りによつて、それが自由に使用されてゐるのだと思ふ。

淤泥の中から咲き出る蓮花に、けだかい品位は備はつてゐる。

膽力強化

小心恐怖症

新正 矯正
法進 明説



◇小心恐怖症◇悲観症◇羞恥癖◇内気性◇おこびやう癖等◇無闇に人を恐れ◇物事に大膽さなく心配し◇無闇に人を恐れ◇物事に大膽さなく目上の人を恐れる等の人は早く其惡癖を直さなければいゝから勉強し學科があつて大失敗を演じ出つた事や他人との成功の第一歩に堂々と乗出来る新自宅矯正法が發明され大好評中「淨土讀者」と記入し急ハガキ申込次第「内容説明書」無代進呈す

申込所

東京市澁野川區西ヶ原町三四六

瑞穂社研究所

繩 跳 運 動 の 指 導

厚生省體鍊課

出口 林 次 郎



一本の繩を廻して跳び越へると云へば至つて簡單ですが、身體の運動につれてこの繩が意のままになるまでは仲々練習を要します。如何ですかうまく跳べましたか。

やうに自由に廻れば先づ及第です。教ふより慣れるで練習が第一です。初めの内は何うしてもうまくなりませんが、我慢して練習を続けて下さい。前回は説明申し上げ

る。わづがたの兩脚跳びと踏替跳びがよく出来るやうになれば、他の跳び方はすぐ出来ます。しかしこの基本となる跳び方が十分でない内は、他の方法もうまくゆきません。

一度に長く跳ぶよりは少しづつ度々跳んで下さい。跳ぶ時間は先づ三分間位ときめておいて、必ず休みを入れて続けて下さい。さうしないと折角の體位向上の目的はたせないばかりか、かへつて過勞に陥り健康を害することとなります。さてそれでは前回のより稍進んだ跳び方について説明しませう。

一度に長く跳ぶよりは少しづつ度々跳んで下さい。跳ぶ時間は先づ三分間位ときめておいて、必ず休みを入れて続けて下さい。さうしないと折角の體位向上の目的はたせないばかりか、かへつて過勞に陥り健康を害することとなります。さてそれでは前回のより稍進んだ跳び方について説明しませう。

大變長い名前ですが、それがそれ程のことではありません。學校の體操で「駢步足踏」(その場駢步)といつて足踏みで駢步をするでせう。丁度このその場駢步をもつとゆつくりやつて、それと同時に兩腕で繩を廻して跳ぶ方法なのです。ですから先づ左腳の膝を屈けて高く舉げた時に、右腳の方では繩を跳んでゐることにあります。そして次には右腳の膝を屈けて高く舉げた時に、左腳の方で繩をとぶのです。こうして兩脚を片方づつ

膝を屈けて高く舉げながらグルグル廻つてゐる繩を跳べばそれで宜しいのです。ただこの場合にその場駢步と少し違ふのは、膝を十分にまげて高く舉げることです。もう一度云ひますと、繩が廻つて足

を跳んでゐることにあります。そして次には右腳の膝を屈けて高く舉げた時に、左腳の方で繩をとぶのです。こうして兩脚を片方づつ

順廻旋踏替屈膝舉股跳

の下にきた時に片方の脚(例へば右)が繩を跳んで、それと同時に他の片方の脚(例へば左)の膝が高くあがつてゐることになりま



図七第



図八第

す。(第七圖、第八圖)初めの内はこの膝がよく舉りませんから少し挙げるやうにして、慣れるに従つてなるべく高く舉げるやうにして下さい。

この場合の注意として、なるべく足先で軽く跳ぶやうにし、しかも高く跳ぶやうにして下さい。また身體の均衡がとれるに従つて、自然と調子が出てくるものですから、この調子に合せて跳

ぶやうにします。

これと同じ跳び方で繩の廻し方を反對にする方法、つまり繩を前から後に廻して後とびにするのがあります。

順逆連續廻旋

この跳び方は一寸言葉で云ひ現し難いのですが、簡単に云へば繩だけが同じ方向に續いて廻つてゐて、これを跳ぶ身體の方が前へ、うしろへと交互に向きをかへながら跳び続ける方法なのです。

これを少し詳しく説明しませう。先づ初めは普通のやうに繩を後から前にと廻しながら跳びます、つまりこれは順廻旋の跳び方でありま

ら身體の前に廻つてきた時に、これを跳ばずに兩腕を揃へて大きく左後の下方に振りながら身體は廻



図九第



図十第



図十一第



図十二第

です。

このやうにすれば繩は最初と同じ方向に廻つてゐて身體だけが後向きになつたので、繩の廻り方が身體の前から頭の上を越して後の方にと廻ることになります。云ひ換へれば逆廻旋の跳び方に變つたわけです。(第十圖)そしてしばらくこの逆廻旋のまゝ跳んでゐます。(第十一圖)

このやうに繩を前から後へと廻しながら、即ち逆廻旋で跳んでゐて、繩が前から頭の上を廻つてきた時に、兩腕を揃へて右横の床の所を後から大きく振つて繩を上へふりあげて、右脚を基準にして廻れ右をします。(第十二圖)するとこれは最初に跳んでゐた跳び方と同じことになつたわけで、又しばらくこの順廻旋のまゝ跳び続けます。(第十三圖)



圖六十第



圖五十第



圖四十第



圖三十第

次にこれと同じ要領で跳ぶのであるが、身體の方向を變へるのに前とは反対の方から變へるやうにします。即ち前の通りに順廻旋で跳び續けてゐて繩が頭の上から前にきた時に右脚を基準に廻れ右をして身體の向きを變へます。そして繩の方は前と同じやうに兩腕を揃へて大きく振つて右後の下の方か

ら横に廻して上に振りあげます。(第十四圖)これで繩は矢張り同じ方向を廻り身體だけが後向きになつたので、繩は身體の前から頭上をこして後の方に廻り、逆廻旋となつて跳びます。(第十五圖)この逆廻旋のまゝしばらく跳んでゐて次は左脚を基準に身體をグルリ廻して最初の位置と同じ向きになります。繩の方は前と同じやうに頭上にきた時、兩腕揃へて大きく左横の床の所を後から大きく振りまわす。これまでも順廻旋となりしばらく跳びます。(第十六圖)

以上のやうに跳びながら四度身體の向きを變へるのであつて、繩の廻る方向は同じながらも身體の方か或ひは左から、或ひは右から後向きになつて跳ぶ方法であります。

この際の注意としては、跳躍す

る時に常に歩調を亂さぬやうにして、同じ速さでとぶやうに努めて下さい。又身體を後向きに廻る時にはつい急ぎ勝ちとなり、從つて動作が小さく急がしくなり易いものです。だから兩腕はなるべく大きく振り廻すやうにして、調子をとつて跳ぶことが大切であります。



圖十二第



圖九十第



圖八十第



圖七十第

腕交叉側方廻旋交互踏替跳これは少し難しい方法なので、簡単に圖の説明をする程度にしておきませう。

先づ普通の順廻旋で跳んでゐて繩が頭上から前に移らうとする時



圖四十二第



圖三十二第



圖二十二第



圖一十二第

奪り難い金

に、繩を身體に引くやうな氣持で
兩腕を頭上から體の前に持つてき
ながら腕を交叉して跳びます。續
いて繩が頭上から體の前に移る時
に、腕の交叉を解きもとの普通の
順廻旋となつて跳びます。ですが
腕が交叉したり、交叉を解いた
りする時に繩は8の字を描くこと

となります。これを腕交叉順廻旋
と云ひます。(第十七圖)
この跳び方をしてゐて、繩が頭
上にきた時に脚の方がもう一度跳
躍します。そして繩が頭上から體
の前に廻つて繩を解く時に、その
まゝ體の前にもつてこないで(第
十八圖)體の右側の方に流し(第

十九圖)その繩が頭上から體の前
に廻つた時に腕を交叉して、繩が
す。(第二十四圖)
つまり繩が足下から體の右側の
方に、そして次には足下から體の
左側に廻つて跳び續けるといふ
やり方なのです。(カットは腕交叉
順廻旋でとぶ筆者、文責在記者)

法州上人は諸國教化をなされてゐたが、丁
度江戸から京にのぼる途中のこと人里離れた
山中で日の暮れに近くなつた頃、何時しか一
人の若者と道連れになつてゐた。上人は氣輕
に四方やま話をしてゐたがふとその若者に

「そなたは何を渡世としておらるるな」
と問ふてみた。すると相手は平氣な顔で、

「盗人の親分です。」

と答へたものである。上人もこれには些か
驚かれたが、流石は顔色も變らず普通のまゝ
の聲音で

「盗人などせず、眞面目な仕事をなされたら
どうぢや。」

とさとされた。しかし盗人はそんなことは
耳にも入らぬといふ風で、

「今和尚さんの懐には甘雨の金があります
な、だが俺は別にそれを取らうと思つてゐな
いから安心してゐなざるがよい。」

とちやんと上人の所持してゐる金高まで云
ひ當てた。これには上人もあいた口がふさが
らぬ思ひであつたが、それでもそのまゝ又世
間話をしながら歩いて行つた。相手が何しろ
盗賊の親分だと名乗る位であるから上人は
それとなく氣を配つてゐたが、上人は

「金を取るのにも矢張り取り難いこともあり
取り易いこともあるだらうな」

と問はれた。すると盜賊の曰く

「それアありますね。非道を働いて出來た金
だと七重八重に錠を下してあつても取り易い
ものですが、眼の前にある金でも、貴方のや
うな徳のある人の金はなか／＼取れませぬ。
何うも身體がすくみ、手が震へて駄目なも
んですよ。」

と。これを聞いた上人も大いに感ぜられた
といふことである。

(法州上人は明和二年四月に生れ、諸國教化の後文化九
年西園寺に住し、天保十年没す)



一條の道を進む

— 日本女性の幸せを思ふ —

山 田 わ か

外國の事情を知るのには内地にだけゐたのでは何うしても十分に判らない。それと同じやうに日本の事や日本に生を享けた有難さについて一度日本を離れてみて初めて氣のつくことが澤山にある。

私は昨年世界を一周してきた。その時往路には僅か二週間で獨逸に着けたのに、歸つてくるのに百三日も要してしまつた。これはすでに各國の情勢が可成り切迫してゐたためで、止むなく南米を廻つて歸つてこなくてはならなかつたためである。そして開戦の御詔書が澳發せられた十二月八日には私達の乗つた船は丁度ウエーキ島附近にあつて、一路日本に向け航行してゐたのであつた。

日支事變が始まる以前は、いや大東亞戦争が始まるまでは米國は日本に對して殆んど全く認識を缺いてゐたと云つても過言でない。例へば米國の國內を色の黄い東洋人が歩いてゐれば必ず「支那人か」と聞かれる。一般民衆は黄色の東洋人は支那人だだけだと思つてゐるので、君は日本人か」とは決して質ねなかつた。それ程日本を

輕くみてゐるのであつて、日本といふ國は支那の屬國である位にか考へてゐなかつた。所がその日本が一度たてばこれだけの力があり、輕くみてゐた米國が惨々たる敗北を喫したのでから面白い。しかし實地に米國や英國に行つてみて氣のつく事はこれら兩國が内地で考へてゐたよりもはるかに大きな國力を持つてゐて決して侮るが如きことは許されないといふ事である。若しも適に米英の實力をこちで輕くみるやうな事があつたらこれ亦大きな誤りである。

私が歐洲を渡つた時はすでに重苦しい空氣で満ちてゐたので、航行中での各地の檢閲は實に嚴重であつた。特にある所で英國官憲の檢閲の如き渡航者の取調べのために五日間を費したことがあり、この折は靴は勿論のこと手さげの中まですつかり調べられた。丁度同じ時に日本大使館員が乗つてゐたが、恐らく重要書類が入つてゐるのであらう日の丸を大きく記した手提鞆を所持してゐた。私達はこれ無慮な官憲がその靴の中まで調べるか何うか内心氣をもんで

見てゐた。しかし流石の彼等もそれには手をつけずに終つた。私達は今更ながらその鞆にクッキリ記されてある日の丸を見て目がしみるのを感じた。日本の強さ、日の丸の偉大さについて本當に有難く止めどもなく感謝の涙が流れ出して來るのであつた。海外にあつて日の丸を仰ぐ時、わが國威の偉大さを感じた時はいつでもわが國力がもつともつと強大ならんことを一心こめて祈らぬわけにはゆかなかつた。それと同時に國力の一端をになふれわれ國民の一人一人がもつとしつかりしなければならぬと痛感するのであつた。

若し國力の弱い國に生れてゐたなら何んなに悲慘であるか一寸でも考へれば強いことの有難さを沁々と感ずるのである。例へばイスラの如きは中立國とはいひながら戰爭中の大國に挟まれてゐるので、何時爆彈が落ちて來るとも判らない。又爆撃されたとしても弱國の悲しさで泣き寝入りするより外に道がない。こんな具合でイスラでは或ひは燈火管制をやり或ひは高射砲を射つて宛も自分の國も一緒になつて戰つてゐるかのやうに常に騒然たるものである。スペインに行つた際も食糧が多いことが目立つて見えた。これは數年に亘る内亂のための國力の疲弊がなほつてゐないためであつて、汽車が停留場につくとそこには澤山の食糧がウヨウヨ集つて來る。名所舊跡の如きも四年前の内亂で破壊せられ、まだそのまゝ復興もしてゐなかつた。國內の對立關係が外からでもよく判る程であり、この國の將來はまだ幾つもの問題を殘してゐるやうであつた。

それが獨逸になるとまるで趣を異にしてゐた。かりに空爆を受けてその結果相當大きな被害があつたとしても、獨逸ではその場所を見せもしなければ知らせもしないで、どしどし復興させてしまふ。すぐには復興し切らないまでもスペインのやうな丸出しにすることをせず見せまいとする心組が覗はれた。又獨逸では總ての國民が「吾等はみな勞働者である」といふ氣持で毎日を働いてゐる。つまり「一日働かざれば一日食せず」といふ意氣である。都會と云はず農村と云はず勞働奉仕團と云ふのがあつてよく働く。例へば都會の女學生達は、六ヶ月といふものは農村に行つて汗みどろになつて勞働奉仕をしなくてはならない。これをしなないと上級の學校に入學出來ないので、都會の娘とか農村の娘といった區別がなくなり、都會に住んでゐるからお米を作らなくてもよいといふ區別をたてることが許されない仕組になつてゐる。

このやうに各國の様子をみるにつけ私共は皇國日本に生れた喜びを感じわが國の頼もしさを嬉しく思ふのである。陸に海に空にあらゆる赫々たる戰果を聞き、皇軍の底知れぬ強さに感激し、前線將兵の武運長久を祈ると同時にこの國運の進展をますます延ばしてゆく爲に、私達も尋常一様の努力では足らぬことを思ふのである。われわれ女性にしても銃後の婦人として出來るだけの力をつくして活動せねばならず又その働くべき範圍がいくらでもあると信ずるのである。先日も島根縣に行つた際母子保護事業にたづさはつてゐる人が、

仕事(しごと)が仲々(なかなか)思ふ(おも)やうに進まなくて困ると愚痴(ぐち)を云つてゐるが、私はこの人(ひと)にかう話(はな)したのである。

「三年(さんねん)や四年(よねん)で仕事(しごと)が思ふ(おも)やうになると考へるのは考へる方が無理(むり)なので、先づこのやうな考へ方(かた)から矯正(きようせい)してかゝらなくてはならない。例へば子供(こども)に何(なん)うも悪い習慣(しやうはん)があつて直らないといふ場合(ばあひ)でも、子供(こども)が悪(わる)くなつた責任(せきにん)を全部(ぜんぶ)自分で背負(お)つて行(い)かうとするからいけないのである。若し満足(まんぞく)な發展(はつてん)を望む(をぞむ)ならば責任(せきにん)の半分(はんぶん)を自分(じぶん)でもち、他の半分(はんぶん)の責任(せきにん)は神さま(かみさま)が背負(お)つて下さるといふ信念(しんねん)を持つてそれで仕事(しごと)をすれば思ふ存分(おもひのぞんぶん)に働(はたら)き続けることが出来る。」

實際(じっさい)に社會生活(しやかいせいふく)の種々(しよしよ)相(あひ)は複雑(ふくざつ)であつて、その一つ一つを取扱(とくさく)つてゆけば際限(さいげん)がない。しかし如何(いか)に複雑(ふくざつ)でもその中で正しい道(みち)はただ一條(いっぴやく)あるだけである。今や世界各國(せかいこく)が何れも死力(しりき)をつくして戦(いくさ)ひ、この優勝劣敗(ゆうしょうりやくぱい)の姿(すがた)の中にあつて、獨り日本(にっぽん)だけが深く根(ね)をはり、ドシドシ前進(ぜんしん)してゐるわけは大和(たいわ)の心に生き、正しい一條(いっぴやく)の道(みち)に生き、これを進(すす)んでゐるからである。

自分達(じぶんたち)の都合(ごうご)だけしか考へない自由主義(じゆうしぎ)の生活(せいふく)ではほとんどの國家(こくが)社會(しやかい)の營(えい)みは出來(こ)ない。總てが自分の自由(じゆう)になり、思ふがまゝにゆくやうに考へるのは思ひ上(おもひう)つた考へである。天地(てんち)の法則(はふそく)に適(た)つた日本(にっぽん)の國民生活(こくみんせいふく)であればこそ日本(にっぽん)が一條(いっぴやく)の正しい道(みち)を進(すす)んでゐるといふことが出來(こ)る。例へば再婚(さいこん)せずにじつと静かな清い生活(せいふく)を送(おく)る日本(にっぽん)婦人(ふじん)の貞操觀念(ていそうくわん)等は外國人(がいこくじん)には理解(りかい)出來(こ)ぬものらしい。外國(がいこく)の未

亡人(はじじん)に對する政策(せいさく)といへば未亡人(みわうじん)は人口増産(じんこうぞうさん)のための道具(どうぐ)であつて、再婚(さいこん)させなければ不經濟(ふけいぎ)であると云ふに至(いた)つてはまさに嘔(え)吐(と)ものである。夫(そ)を海外(かいがい)に送り(おく)子供(こども)を本國(ほんこく)で一生懸命(いっせうけんめい)で育て上げてゐるのである。日本(にっぽん)女性はただ一條(いっぴやく)の心を以て生きてゐるのである。結局(けつくり)日本(にっぽん)女性(にょせい)は飽くまで母性(ぼせい)であるのであつて、太陽(たいよう)のやうに光り輝(かがや)き總てを常に暖(ぬく)かく抱く母性(ぼせい)なのである。諸外國(しよこくぐわい)はいはば小石(こいし)や砂(すな)の混(ま)つてゐる人工的(じんこうてき)のものであるが日本(にっぽん)は混りけのない自然石(じぜんいし)、しかも三千年(さんせんねん)來(き)少しも變(か)らぬ自然石(じぜんいし)なのである。ここに日本人(にっぽんじん)の偉大(ゐだい)さがある。日本(にっぽん)女性の偉大(ゐだい)さがある。身體(からだ)の大小(たうせう)を較(くら)べれば、勿論(もちろん)我々(われら)の方が劣(おと)つてゐるが、心の問題(しんどの問題)では彼等(かれら)よりはるかに優(よ)れてゐるのであつて我々(われら)が彼等(かれら)の指導者(しどうしや)たる立場(たてばた)にあることは確實(かっぴつ)である。

米英(まいえい)になじみ米英(まいえい)の影響(えいこう)の濃(こ)い大東亞(たいとうあ)の諸民族(しよみんぞく)を日の丸(ひのまる)の中に抱(かか)擁(よう)するのは單(ただ)に力(ちから)だけではない。母(はは)の心(こ)ただ一條(いっぴやく)の正しい心(こころ)を以てする指導(しどう)である。仕事(しごと)が大きければ大きい程(ほど)日本(にっぽん)女性(にょせい)は世界最高(せかいこくごう)の地位(ちゐ)にある事を確(たしか)り自覺(じかく)して自分(じぶん)の仕事(しごと)を幸(さい)せだと思(おも)はなくてはならない。米英(まいえい)のやうに金の力(ちから)學問(がくもん)だけの力(ちから)で世界(せかい)が支配(しはい)出來(こ)ると思(おも)ふ考(かん)へ方は誤(まち)りである。日本(にっぽん)女性の目標(きくはく)は日の丸(ひのまる)となり、日の玉(ひのたま)一丸(いっぴやく)となつて丁度(ただ)太陽(たいよう)の中にありながら光(ひかり)を出(だ)さぬ黒點(こくでん)の如(ごと)き彼等(かれら)一同(いっとう)、日本(にっぽん)女性(にょせい)ならざる心を抱(かか)く彼等(かれら)の總てをその迷夢(めいむ)から醒(さ)ませ、ともかくこの正しい一條(いっぴやく)の道(みち)を歩(ある)ませてゆく事が我等(われら)日本(にっぽん)女性(にょせい)の役目(やくも)であり、正しい勤め(しんめ)であると信(しん)ずる。(文責(ぶんせき)在(あ)記者(きしゃ))

與謝野晶子先生小傳

本誌歌壇の選者與謝野晶子先生はかねてから病氣御静養中でありましたが、藥石効なく去る五月二十九日午後四時三十分天壽六十五歳をもつて長逝されました。

白櫻院鳳翔晶輝大姉、合掌。

先生は明治十一年十二月七日鳳宗七氏の



白櫻院鳳翔晶輝大姉、合掌。

エターナル

トシヨシ

三女として大阪府堺市に生れ長ずるに従つて同地宿院小學校から堺女學校へ、更に同校専

攻科に學んで明治二十七年了へられました。

その後は専ら家にあつて自學獨習の日を送りました。

先生は早くから文學と歴史に興味を持ちたれ十七八歳の頃にはすでに日本の古典と

歴史を殆んど讀破し、特に平安朝文學に傾倒されました。

後年源氏物語の味解の第一人者となられたのも、その素地はすでにこの娘時代に出來てゐたのであります。

明治三十三年新詩社同人となり、同三十四年の初夏にはるぼる出

京し、その秋のこと故與謝野寛先生と結婚し

ともどもに雑誌明星の經營に當られました。

先生の歌集は明治時代のものが十、大正以來のものが十五もあり、その他評論、隨筆等の著書をあげれば積みば等身位もある多數に及んでゐます。

先生が明治、大正、昭和の三代に亘つてわが國短歌の革新に、育成に盡された功績は實に大なるものがあり、現日本の詩歌壇の水準を眞に價値あるものに引上げられた第一人者といふことが出來ます。

又地方評論を以てしても日本婦人の地位の向上に努力せられた功績も見逃してはならぬと思ひます。

大正元年夫君寛氏のあとを追つて渡歐され

た際には佛蘭西を主として歐洲各地に遊ばれました。

歸朝してから大正十年には文化學院の創立に加はり病氣で退くまで二十年の長い間同學院の學監として現代子女の教育に盡されてゐました。

尙家庭には五男六女があつて、長男光氏は醫學博士、次男秀氏は外交官として令名あり、その他優秀な人物揃ひであることは、先生が文人として社會人として優れてゐるばかりでなく家庭の人としても良妻賢母であつたことを物語るものでありませう。



生活の歡喜

慈顔を仰ぐもの

戸松學瑛

東京目黒行人坂に、悲戀の哀話に花を咲かせた八百屋お七の愛人吉三が無常を感じて出家の身となり、諸國巡禮の後に草庵を結び、ひたすらに情人の冥福を祈つた由緒の寺がある。江戸の大火に焼死した萬靈供養のために建てられた石刻の五百羅漢が崖ぎはの森の中に

に安坐して居る。中央の釋迦牟尼佛を始め文殊普賢、さては五百の羅漢さまはどなたもこなたも申し合せた様にほゝえんでゐらつしやる。何と素晴らしい笑ひの道場かなと私はいつも參詣の折すがすがしい心地で飽かず眺め盡くすのである。江戸五百人の石屋が腕を揮つたであらうこの羅漢さまの御面相に苦惱の表情が微塵だも現はれてゐないのは誠に尊いことである。五百の聖者方は路傍に浮世の塵を浴びながら何年も何年も不足不平の顔一つせず、じいつとあゝしてゐらつしやる。文字通りの和合衆、僧伽の生活が今此處に立派に行はれて居る。石の羅漢が文句を云ふわけもなし、言へるわけもないなど、評する勿れ。

法に基いて存在する天地に住する者は恐らく今も昔も同じではなからうか。二千五百年前釋迦牟尼尊御在世の頃、千二百五十人、萬二千人と稱せらるゝ大衆も皆この通り佛の會坐に侍べつてほゝえみの裡に尊い日を送つて居つたに違ひない。如是我聞に始まるお經文の終りに歡喜信受とか、皆大歡喜とか、靡不歡喜とか、謂はゞ法悅至極の句を以て結んで居るあの金文字を見るがよい。

佛には遇ひがたい、然るに今眼のあたり遇ひ奉つた。正法は聞きたい、然るに今聞くことが出来た。今まで悟り得なかつたのに今正に悟ることが出来た——この三つの喜びに會坐の大衆は手の舞ひ足の踏む所を知らぬ

のであらうと天台大師は説明づけられて居る

二

早春の或る日一僧者を介して中年の婦人が訪ねて来た。どうか檀家の一員に加へて下さいと云ふのである。

私は宗旨も違ふやうであり又今迄亡き自分の子供等の御同向を永い間御願ひして居つたお寺もあること故、こちらへ来ることも不可をいう／＼と説き論した。その婦人も大分迷つて居つたが最後に納得し、それではと立ち上り、お別れの挨拶ながら本尊さまへ禮を遂げたいと本堂へ行つた。所が、やがて、もとの坐に戻つて来るや否や『どうか私をこちらの檀家にして下さい、幾重にもお願いいたします』と諦めた先刻の話とは逆に、感激さへ浮べて切りに私に懇望するのであつた。この心境の大變化に私は驚き入つたが、誰が何と申

しても私の決心はきつと變へませんと縷々繰り返す婦人の言葉や様子を察知した私は、これも本尊さまの御指圖かと我を折つてその希



望を容れる事とし先方のお寺への手続を了させたのであつた。純情であるせいもあらうがこの婦人は唯本尊前に坐つて尊容を拜んだ

けで早くも覺悟がついたのであらう。

『如來さまの御顔を拜んで居りましたら何とも形容の出来ない御威光に打たれ又明るい気分になり、嬉しさが胸に込み上げて來ました。實に有り難い思ひをしました。先祖も子供も自分達も是非この如來さまに濟つて頂かうと決心しました』と述懐した。無批判に唯本尊を拜んでゐたこの婦人に、如來は善巧方便を以て、本當に自己を捨て、自己を否定して佛に生きる者の喜びを味到せしめたのであらうか。起つて尊容を拜すれば光韻巍巍として威神極まりない慈覺大師開眼の千年鎮坐の如來像は何時も變らず、念ずる者に慈悲の御眼を注がせ給ふて居るのである。

三

バタン半島の攻略戦で工藤部隊長の砲列の下に拉繩を握りながら壯烈な戦死を遂げた天嘯忠孝兩全の勇士と仰がれた千葉縣市川市出身の山崎秀太一等兵、去る三月三日の戦闘には射手として出陣、發射音、彈着音が交錯して轟々たる修羅場の中で、敵の一彈命中、數

個所に重傷を負うた。山崎一等兵は最後の拉縄を引き終るや、かすかに「お母さん」と叫んだ。戦友が引き寄せて「遺言か」とたづねた。再び真白い唇をついて出たのは「お母さん」の短かい言葉であつた。隊長はしつかと握つた拉縄を解かせて竹藪に收容した。部隊長は死してなほ拉縄を離さぬ崇高な攻撃精神と死の際に母を呼んだ親を思ふ優しい心根にうたれ即日一等兵を兵長に進級させた。戦地からのニュースが報じて居る。父母恩重經に「母は兒を見て歡び、兒は母を見て喜ぶ、二情の恩悲す。親愛の慈重きこと復これに過ぎたるはなし」と佛は仰せられた。

佛前に坐する念佛信者、母の膝下に坐する子供、佛と母との違ひこそあれ、前に坐する者の心情は一つ、曰く信心歡喜、歡喜踊躍。華嚴經に「信能歡喜入佛法」信は能く歡喜し佛法に入ると云ふ偈文がある。この信能歡喜の徳を佛說無量壽經に拜見すれば、歡喜信樂、信心歡喜とある。梵語に之をプラサダーと云ふ。プラは接頭詞にして、前。サーダは

語の本體にして坐すること即ちプラサーダとは「前に坐すること」である。大慈大悲の佛の前に坐することは即ちこれ信心歡喜であり歡喜信樂であると翻譯家は指摘されたのである。佛の前に坐する時、佛の、み恵が我が身内に働く、身も心も歡喜に満ちる。母の膝下に坐する子供に母の愛は働く、母の歡びが子供のそれとなり、母子相擁して歡喜極るところがない。

法然上人は

うけがたき、人身を受けて、あひがたき本願にあひて、おこしがたき道心を發して、はなれがたき輪廻の里を離れて、生れがたき淨土に往生せん事、悦びの中の悦びなり

と仰せられた。道心のあるところ必ず法悦あり、信心の在るところ歡喜あり、歡喜の在るところ信樂ありと申さうか信心の姿はそのまゝ歡喜の姿である。

善導大師は、念佛の行者、口に佛を唱ふれば佛は之を聞きたまひ、身常に佛を禮拜恭敬

公益に倒れる

都築彌厚が十數年に亘る苦闘のため心身ともに疲れて、六十九歳の病軀を横たへてゐると垣根の外からまたしても彼を嘲ける聲が聞えてきた。ついこの間も債權者の一人が彼の枕もとにきて、「金を返せ、金を返さいのなら？」と玄關の覺をめぐり上げて行つたことがある。このまゝ工事の曙光も見ずに死んでゆくのか」と思ふと彼の胸は掻き捲られるやうで瘦せた手に自づと力が入るのであつた。それは天保五年秋にけなはることであつた。

彼が酒の醸造を營んで、その全盛の時には大名を凌ぐ位であつた。儒を學び俳句をよくし頼山陽と交友のあつた彼は、苗字帯刀を許されてゐたが、用水開發のため常陸十年の後には有り餘る私財を總て投げ出しても尙たらず更に二萬五千圓の借金まで背負つてしまつた。

すれば佛は之を御覽になる。心常に佛を念すれば、佛は之を知らしめし給ふ。佛の身、口、意と、行者の身、口、意との三業が相離れな



い之を親縁と言ふと申された。佛前に坐して心爽かに歡喜の情を催すのも、念佛して三業相離れぬ護りを頂くのも、孰れも如來の哀愍の賜ものならざるはないのである。

經に其れ衆生あつて、この光に遇ふ者は、三垢消滅し身意柔軟なりと示されてあるが、一たび如來大悲の光明に照らさるゝ者は貪慾、瞋恚、愚痴の三毒の煩惱が消え失せ一切の妄念が除かれる。こゝに於てか心の闇が去つて明るさが来る。心が明るくなるから見るもの聞くものが喜びに生きる。佛の教を信する者が、念佛を行ずる者が佛と共にあるその日を送り、明るい人生、喜びの生活を享受するは正に當然のことである。

四

大東亞戰爭緒戦に於て赫々たる戦果を擧げて世界を驚倒せしめた彼のハツイ眞珠灣特別攻撃隊の一員稻垣清兵衛長の母は軍神の母として如何なる教養

彼の住んでゐた愛知縣碧海郡明治村大字和泉は、高い丘ばかり續いて灌漑不便な荒蕪地であつた。従つてそこに住む百姓は何れも惨憺な生活をしてゐた。彼はこの郷土の悲惨な生活を見て用水開鑿による根本的救ひを實行しようとしたのである。先づ彼は領主や農民たちに用水開鑿の利を説いてまはつた。ところが農民の人達は疎水が出来るとこの地一帯が湖水になつてしまふと云ひ、漁村の人達は疎水のため海岸に土砂が流出し、漁業が出来なくなるといつて全然反對した。彼は人々の反對の中で人目を忍んで測量を続け、五年かゝつてやつと測量を了つた。

天保四年彼の出した願書により幕府から用水開鑿と荒野開拓の許可があつた。しかし各地の人々が竹槍を持ちたり建旗をおしたりして彼の工事を妨害したので何も出来なかつた。その内遂に彼は病魔に冒され人々の嘲笑の内に淋しく死んで行つた。彼の遺族は莫大に負債のため一家は離散してしま

を子供等に與へて居つたかその家庭が如何に信仰づけられて居つたか世人の知る所であらうが稻垣家は先祖代々佛への信仰を家訓とする家柄であつた。母親あやをさんの生母である北出ふささんも又祖母であり養母である故稻垣たいさんも熱心な信仰家であり、幼い時から母や祖母のお寺詣りのお伴をしてゐたさうである。母親あやをさんは六人の子供に對し祖母や母のお寺詣りの習慣を踏襲し、幼い時からお寺の本堂に坐らせ母とともに法話を聽かせた。

夕食後の團樂に念佛を唱へるものは、腹を立てるな、争ふな、正直にせよ、恥かしい行ひをしてくれるな、無理な慾をするなと口癖のやうに言ひきかせてゐた。

この母親は大陸に征く子らへ餞別として與へたものは南無阿彌陀佛の懷中名號で『如来さまとともに戦ふんだぞ』と信仰を通じた戦陣訓であつたと。時局柄反響を各方面に與へて居る。

東京澁谷の日本赤十字社病院に收容されて

居る名譽の傷痍軍人、公病勇士の母と云はんよりお祖母さんと云ひたい看護婦南條まつ子さん。まつ子刀自は老齡正に八十歳、日清、日露の戦役は勿論數々の勳功に身を飾る譽れの看護婦であるが、今尙壯者を凌ぐ元氣で勇士達の修養室、娛樂室の主任として三面六臂の活躍をつとけて居る。規律正しい赤十字へ毎日二キロ以上を往返し、白衣の姿も甲斐甲斐しく『たゞ有り難い、勿體ない、佛さまのお蔭です、自分の力ではありません』と明朗にテキパキと奉仕の仕事にいそしんで居るのである。まつ子刀自をして、こんな不思議な力を與へて居るものは外ならぬ佛さまである。

この八十の老刀自は今尙淨土宗青年會の會員としておカツバや、お下げ髪乙女達と肩を列べて毎度の青年會に出席して日新の修養を怠らず、讀經に念佛に、聞法に唱歌に餘念なく老を忘れてひたすらに、すなほに、精進求道を續けて居るのである。忠孝の道も佛道の入門よと青年男女に身を以て教へ、信仰に

つた。

こうして都築彌厚が死んで二十年がたち栗寺村に住む伊豫田與八郎が同じやうな計畫をたて猛運動を始めたが矢張り頑迷な多くの人々のため少しも進捗せず悪戦苦闘する内に歳月が流れて行つた。丁度この頃大濱村の岡本兵松が彌厚の計畫のあつたのを知り、民衆の幸福のために用水を開鑿するの計畫をたて、その筋にそれぞれ願ひ出た。しかし仲々許可が下りず、この出願に夢中になつてゐる内に五年の月日が経つてしまつた。明治六年のこと與八郎と兵松が同じ計畫を持つてゐることを知つて今度は連名で願書を出した。その時も役所の都合や役人の移動やで實にめんどろなことがあつたが、それでもやつと工事の許可が下りた。許可を手にした與八郎と兵松は今度は出資者をさがすに苦勞したが、結局六人の出資者から八萬圓を得て工事を始めたのが明治十二年一月のことであつた。そして同十三年四月十八日にやつと出来たが、その

生くる人間の行くべき道を老軀を以て惜しみなく教へつゝ居るのである。

この老刀目と同じく私の寺へ集まつて来る青年會の少女、石川靜子さんは、まだ國民學校を卒へて間もない子であるが、同人持ち寄りの『門』と云ふ小誌に信仰の喜び、嬉しさを述べて居る。

お經
ちようどお彼岸の朝だつた。私はお風呂場のお掃除をして居た。すると誰か何時の間にかけたのかラヂオがなつて居た。

間もなくアナウンサーの聲がした。知恩院からの放送だ。やがて大僧正と共に大勢のお坊さんがお經を讀み始めた。知恩院は淨土宗だ。勿體ないけれども私はお掃除をしながら毎月修養の會で習つたお經をところどころ覚えてゐたので一しよに唱へた。四聲の例まではどうにかつた。

だがあとはわからなくなつてしまつた。だが今日のお彼岸に知恩院から放送されたお經を自分も共に唱へられたことが嬉

しくてならなかつた。これも先生の御かげである。あの青年會に入る前にはお經なんて變なことばかり言つてゐる。お寺なんか氣持が悪いなどと思つてたその心が今では取かしく思はれた。お經の一言一句が人間生活に最も大切な修養である。青年會に入つて私はこんなに佛さまが尊いと言ふことを知り、つく／＼有り難く思つた。

尚この子はまはらぬ筆をつゞけて佛さまの教へを受けて生活がたのしく、正直に進むことが出来、何ともいへない有りがたい心になつた、いやな氣持がした時は佛さまの前でお念佛を唱へると一時に去つてすが／＼しい氣持になれ、その日を最善に暮すことが出来る

と心のたけを記して居る。

軍神の母の心かけは言はずもがな、八十の老看護婦も、うら若き乙女も、とり／＼に花を咲かせ實を結ぶこの眼前の事實こそ信ある者の歡びを、念佛行者の嬉しさを如實に語るものではなからうか。(大場比羅夫畫)

時の兵松の日記にその日の感想を「身の毛の立つ有難さ」と述べてある。

この明治用水が出来て附近一帯の目覺しい發展をみたのは當然であつた。山林原野は開墾されて良田と變つて行つた。しかるに當の計畫者であり長年の苦心慘たんたる努力を續けた與八郎、兵松の二人は、この事業につき込んだ費用の負債のために一家離散の悲境に喘ぐやうな事になつた。特に與八郎は大庄屋として先祖から傳つた田畑から家屋敷まで人手に渡り反つて莫大な借金に首が廻らぬ始末であつた。明治用水の恩恵で非常によくなつた村民達に與八郎をみて氣の毒に思ひ、彼を明治川神社の神職に迎へた。また與八郎、兵松の二人と六人の出資者を祀つて伊佐雄社を建立した。そして與八郎は自分が祀られてある伊佐雄社に神職となり、即ち祭神自身が神職となつて朝夕奉仕することゝなつた。彼は明治二十八年二月二十五日に七十四歳の天壽を完了してその生涯を終つた。

飾る生き方と磨く生き方

梅 原 眞 隆

美しい生き方^いをしたいものである、これはすべての人々^{ひとびと}の念願^{ねんがん}であらう。
そして、おほくの人^{ひと}たちは美しくなるのに表面^{うへ}を飾^{かざ}りたてるとばかり工夫^{くふう}して、内側^{うちがは}から磨^{みが}きあ
げ^あることを怠^{おそ}りがちである、これは大きな手落^{ておち}であらう。

日光^{にっこう}の宮殿^{きやうてん}は極彩色^{ごくさいしき}で莊嚴^{そうげん}されてある。粗野^{そや}な田舎^{いなか}ものが素通り^{すどおり}するのも勿體^{もったい}ないやうである。こ
れも「美^み」のあらはれ方^{かた}のひとつである。これを典型^{てんぎん}として美しく修飾^{しゆしき}しようとすることも、一種^{いしゆ}の
生き方^{いかた}ではあらう。

掃除^{そうじ}の行届^{ゆきとど}いた禪院^{ぜんいん}の廊下^{らうか}、それは節^{ふし}だらけの粗末^{そまつ}な木材^{もくざい}でつくつてあつても、朝^{あさ}な夕^{ゆふ}な雑巾^{ざふきん}をか
けて磨^{みが}きあげられたところに、まことの美^{うつく}しさが浮彫^{うきびよう}されてゐる。「塵穢^{ちんたい}を掃^ぬふは第一^{だいいち}の佛法^{ぶつぽふ}である」
といふ清規^{せいぎ}に培^{つちか}はれ、まごころこめて雑巾^{ざふきん}がけをしたところに艶消^{つやけ}しの深い美^{うつく}しが匂^{にお}ふてゐる。私はこ
うした生き方^{いかた}によつて、ほんたうに美^{うつく}しく生きられるのであらうとおもふ。

×

蓮月^{れんげつ}は上賀茂^{かみかもち}の神光院^{しんくわういん}にかくれて晩年^{ばんねん}をおくられた。

ある夏^{なつ}のこと、鐵齋^{てつさい}がたづねて行くと、尼^には何時^{いづれ}もと風變^{ふうへん}りな荒^{あら}い縞目^{しまめ}の浴衣^{ゆかた}をきてゐる。鐵齋^{てつさい}は



おどろいて

「エライ派手なお召ですなア、どうなさつた」とたづねると、尼もはじめて派手と氣づいたらしく述懐した。

「ハア、なるほど派手かな、わたしはそんなことに氣がつかず、これは一番安價で、丈夫そうであつたから、買ふて來ました」

こんな調子で連月尼は一生、着かざるといふことを知らなかつた。しかし、最後まで美しい感じを與へた。それは天稟の麗質にもよるが、身だしなみの深いところに起因してゐると私はおもふ。連月の美しさはつねに磨かれてゐたのである。

女は不淨なものだから

とて、年とつてまでも、干菜を煮た湯を鹽に汲んで、いつも腰湯をすることを怠らなかつた。寒中

×

紅白粉をつけること、衣裳を着かざること、それを怠つてはなるまい、それは床しい女のたしなみとして工夫されるのであれば、うはべをかざることが、内面から磨く修業になるのであらう。

けれども、姿をかざり容をつくらふよりも心を磨くことが、根本の工夫である。

禮拜には端正の徳がある。佛を拜んでくらす人は佛の光にふれると、おのづから身も心も柔軟になる。佛の名をとへると言葉も行爲もおのづから床しく薫るのである。

×

内に道心を磨くことは、外を化粧して修飾することよりも、美しく生きる捷徑である。





創作 給仕の一日

酒井菊一郎

僕は晝間の内ある會社に給仕をしながら、夜は市立夜間中學校に通つて、やがて来る上級學校の受験のために日夜勉強に精進してゐる一個の學生である。

元來、僕はとかく感情に走り易い性質の持ち主で、それからそれへと空想ばかりが頭の中を占領し、感傷的にながれ勝ちであり徒らに時間を空費する缺點を持つてゐる。これではいけないと幾度か反省し、自覺してはゐるものの、終ひには先天的なのでないか知らと考へる程、自分で自分の頭が始末出来ないで困る。さればこそ僕の希望に違つて勉強の方の能率が段々低下してゆくのが惱みの種である。

今日もこんな問題が起つた。

僕は玄關の受付で新しく入つたばかりの給仕宮城君と二人で机に向つてゐた。たしか十時頃であつたらう。先刻から會議室に會社の幹部たちが皆集つてゐるので、また會議か：

……と内心恐れをなしてゐた時に、いつも亂暴で大きな聲でどなり立てないと氣がすまない云ふ嫌な癖のある上に、御丁寧にもこ自分ではそれが得意であるといふ誠に救はれ難い頑固爺の三宅さんが、例の如く十間以上も先方から「野崎屋へ一圓の辨當を二十本……」とどなりながらやつて來た。辨當を二十本頼めといふのである。僕は返事だけでもと思ひ、「ハイ畏まりました」とどなり返した。これは何時ものくせで「野崎屋は遅れて困るではないか」といふ僕に關係のないこと

まで叱る三宅さんの小言を封じためでもあった。僕は傍の宮城君に「今の電話をかけてくれないか」と頼んだまゝ、讀みかけの國文教科書に目を走らせた。人のよい宮城君はすぐ椅子から立つて玄關裏の電話交換室に駆け込んだ。ところがすぐ彼が出てきて受付の傍の公衆電話式のボックスに入つたところをみると、多分交換嬢の小堀さんに「自分でお掛けなさい」とでも云はれたのであらう。

受付の窓からは小公園の新緑にもえる樹々が見える。元氣のよい男の子がブランコに乗つて思ひきり振つてゐる。四年生位の女學生が二人連れで公園を抜けてゆく。休日でもないのに學校を休んでゐるのだらうか、今日のやうに天氣がよいと僕だつて仲々勉強がはかどらない。強い陽ざしにぼんやり見とれてゐると、忘れた頃に宮城君がボックスから出てきて、「いくら掛けてもお話し中で、いやになつた」とこぼしてゐる。さつきから同じ番號を掛け通してゐたものらしい。

そこへ丁度交換嬢の小堀さんが出て来て、

さもお氣の毒にと云つた顔つきで、

「まだ掛からないのオ、電話の掛け方知らないのぢやあないの、ぢやねえ、野崎屋さんはもう一つ電話があるからその方を掛けてご覧なさい。」

と親切さうに宮城君に教へてやつた。彼にしてみればダイヤルを廻し通して人指し指の先きがあかくなる位痛くて困つてゐる所なので、それこそ大喜び、もう一本電話のあることに氣のつかなかつた自分の愚かさに恥しい思ひで早速教はつたばかりの番號をかけた。ボックスに入つた。今度は一度で掛つたらしく、「モシ／＼野崎屋さんですわ……一圓の辨當を……」と頼んだ。

するとこは如何に、先方では「こちらは野崎屋ではありませんヨアハハハ！」と大膽たてゝ何が可笑しいか笑ふのであった。

こうなると僕も心配になつて來た。電話を掛けるだけに時間をつぶして、また三宅さんから啖鳴られてもつまらない。僕は電話一つ

に手こずつてゐる宮城君に腹がたち「一體何

番をかけてゐるのか」と聞いてみた。ところ

があるので、彼の云ふ電話番號を聞いて餘りの

馬鹿々々しさに僕はあいた口がふさがらず驚

いてしまつた。外でもない、彼の最初に掛けて

てゐた番號は、ボックスの電話自身の番號だ

つたからである。これでは何百回かけてもお

話し中なのに決つてゐる。彼が如何に新米だ

とて偽つて會社自身の番號を教へてやつた小

堀さんの惡戯はひどすぎる。そして二回目に

かけた番號を聞いてみて、また僕は「アッ」と

驚いた。「こちらは野崎屋ではない……」と

斷られたのも道理である。その番號は紛れも

なく、交換臺の内の一本に通じるものではないか。こうなると僕たるもの彼女の悪い仕打

ちを黙つてゐるわけにゆかなくなつて來た。

僕は平生から意地の悪い彼女に腹が立つて

ゐた。女學校を三年で退學してからすぐこの

會社に勤めたとか、口だけは可成り上品なの

だが、何うも皮肉が多かつた。僕は内心で小説に出て來る家庭の没落による不幸なお嬢さ

んと云ふやうなものに結びつけて考へたりしてゐたが、明朗かと思ふと急に突慥貪になつて譯のわからない彼女の存在は惱みのたねでもあつた。

しかし今度のことは親切さうな顔つきで、二度までも悪戯を重ねたところに我慢のし切れない奮慨があつた。それに引き換へ、他方宮城君の方は別に怒つた様子もなく、もともととお人好しの彼だけにただ笑つてゐるばかりであつた。「これだから女にまで嘗められるのだ」と僕の方が反つて勘をこぼらせるのも無理ではあるまい。僕はさかんに宮城君が復讐するやう煽動してみたが大して反響も現れないのには當がはずれてボカンとしてしまつた。憎んでも尙餘りあるのは今の彼女の仕打ちである。ここで泣寝入りしては僕の腹の虫がおさまらない。僕は一計を案じ、例のボツクスに宮城君を通れて行つた。そして交換藍の番號を廻してから尤もらしい聲でこう云つた。「モシ／＼こちらは〇〇ですが」と先づ偽名して、「恐れ入りますが、そちらで開催中

の會議で缺席なさつた方をお調べ願ひたいのですが……」

すると何もしらない彼女は眞面目くさつて「只今お調べしますから少々お待ち下さい」と返事した。そこで受話器を宮城君に渡して僕一人ボツクスを出てしまつた。

暫くして、彼女は調べ終へたのであらう、何やら數名の名前を呼んでゐた。すると宮城君は「小堀さんの大馬鹿さん、これがさつきの仇討ちだ。僕の聲が解らないのか」と

と、變に聲が上つて、口調が詭り、これだけを一気に云つてのけると受話器をかけてとび出して來た。彼にしてはほんとに上出来であつた。僕は後難を恐れて席を立つた。そして用のないのにあちこちをさも忙しうに歩き廻つた。

ボカボカする陽ざしに社員たちは晝食や散歩に出掛けて各室は閑散だつた。僕が受付まで來ると、丁度今をさかりと、小堀さんと宮城君が口論に火花を飛ばしてゐるところであつた。僕は全く悪い所に來てしまつた。

彼女の口槍は宮城君だけではもの足りないか僕の方にも手きびしく繰出して來た。戸板に水を流したやうになめらかな彼女の辯舌はまさに當るべからざるものであり、いよ／＼高潮に達して惡口から罵言となり、遂には宮城君も僕も不良の汚名をきせられてしまつた女を相手に口論するのは、僕の望むところでないがこうなつては仕方がない。

「先刻の君の惡戯、あれは何んだ。あんなことをしておいて文句が云へた義理なのか！」ときめつけた。

しかるに何事であらう、彼女は「そんなこと知らないわ／＼」と口もとが、妙にこわばり顔色まで變へて繰り返して否定するのであつた。こんな無責任な言葉がよく吐けたものだときれてゐる僕に向つて、今度は、「誰か、あんたの一番こはさうな人に、云ひつけてあげるわ……あんたの所へなんか、誰もお嫁に行かないから——」

と云ひ捨てて、さつさと交換室に入つてしまつた。(山崎善一畫)

歌壇

岩部長久代



北海道 中村茂舞

おもねらぬ性を誇りにわが一世貧
しさに耐へ老いにけるかな

評 清貧高邁の心持を歌つたしみじみした作品である。貧困の生涯を送つて今や自分も老境に入つた。真苦の道ではあつたが振返つて見て、真先に良心に耻ぢぬ行爲をして来たことを今は清々しい心地で味つてゐる。貧しくとも節操を持し人に恥を屈しなかつたところは快いものである。

朝鮮 編谷銀三郎

つぶやきつ鳴りつつ下る木曾川や
わがふるさとの水を集めて

評 或時は靜かにひそひそとつぶやくやうに、又あるところは華やかにしぶきを上げて鳴りわたり過ぎながらあの長い長い木曾川は流れ下つて居ります。あの川上は私の故郷だ、なつかしいわがふるさと、山々の水は昔この木曾川にあつてゐられて、今わが眼前を悠々と流れて行く、作者の感動の高い歌である。

京都市 福島孝治郎

彈丸散飛び交ふ裡に臥しながら情
あまれる文おこすかな

評 作者に取つては子か兄弟か親しい人の軍陣だよりであらう。どんな事が書かれてゐるかは、作者のうれしさうな又感きまはつた吐息で察することが出来る。生

命を投出す凄じい戦地に身を置き乍ら忙しい中をよくもまあこんなに思ひやりの深い詩の身に沁むたよりを下さつたものですね。

東京 上野昌子

断ちがたき愛も涙もあらましを秘
めて語らず靖國の妻

北海道 山本由馬

おほみふね進む大洋仇ぶねの影だ
にあらずみな沈められ

北海道 金石正史

石狩の若草かをる大空に輕爆九機
悠々と飛ぶ

大坂府 大村恒一

北嶺に根を下さんとゆくら子らの門
出祝ひて旗の波立つ

静岡縣 山本武次

病めどわれ日本男子を傳統の熱き
血潮は身内に満つ

澤田國 鶴岡慈雄

國境へ新しき兵到りけり迎へてわ
れは眼に涙しぬ

愛知縣 稻本利一

「生還を期せず」と兄のいくさ文

短かけれどもきびしかりけり

北海道 柳原一校

大東亞われも築く身摩はんと吾子
は夜學のせまき門越ゆ

滋賀縣 佐和明淳

あめつちを指さし給ふみ佛に注ぎ
まつらん甘茶の産湯

東京 藤林貞子

年月を苦しみあえぎ過しつづ解く
にすべなし涙なかるる

東京 押野尚秀

木々の梢に夕日たゆたふ山里の靜
寂を發きて啼けるひぐらし

東京 丸山勘四郎

こぞ征きしわが友今はふるさとの
青葉の蔭の塚に眠りぬ

埼玉縣 堀川健雄

亡き人のいたく好める細き雨佛は
今日も降らせ給へる

茨城縣 眞木謙太郎

里の歌はのかに聞ゆ黃昏の帳の中
に牛のいななく

北海道 花田順住

親しみも怨みともに南無阿彌陀
ほとけのめぐみへだてあらめや

東京府 小柳萬

かなでたる軍醫マアチ終へし時胸
高鳴りぬ戦果如何にや

大分縣 淺輪桃舟

めぐりぬ大詔奉戴日
半身を失ふごとき心地すと姉逝き
てのち義兄は嘆きぬ
静岡縣 一向山人
たたかひに勝ちぬくまでは不自由
を常と思ひて耐へて行かまし
北海道 寺田順山
一億の人の心は一九となりてまも
れやすめらみくにを
兵庫縣 山本たか
國の楯いかに慰めまらせん心ば
かりに過ぎつることよ
熊本縣 江崎壽美江
攻防を實戰のごとふるまひて兵士
の顔のよこれ光れる
京都市 葉山千高
青柳のかげ踏む道にうなみ子も萬
づ世よばふ驍騎の日を
長崎縣 仲西龍雄
攻めとりし仇の岩の鳥毎に光かゞ
やく朝日子のかげ
熊本縣 五野一之
大君に答へまつりてみ民われけふ
ぞ捧げん清き一票
朝鮮 三浦砂千子
春の夜のながきを夢とみあかして
うつともなきわが心かな
はがきに一回二首以内と
あて住所氏名明記の上送
ること

投稿規定



相

仰

(問)

毎號お教へ

天野四郎は何んな人か

解答 中村辨康

(質問 歡迎)

を頂きますことを御禮申し上げます。偕て時折、天野四郎なる人の名が出て居りますが、罪あるがために非常に苦しんだ人らしく思ひます。その人の傳記又は多少共、生活なり態度なりの様子をお話して頂けましたら幸甚に存じます。(御影・無名生)

(答)

勅修傳卷二十を御覽願ひたいと思ひますが、拾遺古德傳(眞宗系の

法然上人傳)には「耳四郎」と云つて居ります。河内國丹南郡天野村の出生ですから「天野四郎」と云ひ、早耳で何處其處へ今日いくら金銭がはいつたと云ふことを聞き出すのが上手でしたから「耳四郎」と仇名されたのです。兎に角殺人強盜竊盜の張本でかなりの悪人であつたらしいですが、或る時、それも大分老年になつてからですが法然上人のお弟子法蓮房信空上人(右大辨行隆朝臣の息)の宿所

である姉小路二階房に忍び込んで、盗みをしようにと縁の下にかくれて居ると、其日法然上人が御越しになつてお話がありました。四郎は何氣なくその話を床下で聞いて居ります。「如何なる罪深いものでも如來の本願に依つて救はれる」と云ふことがらでした。宿善開發と申しますか、その話が段々身にしみてもう居ても立つても居られなくなり、遂にこの道ひ上つて上人の前に出て懺悔し上人の御弟子にして貰ひました。或る説には恐ろしい夢を見て發心したのだとも云ひます。お弟子になつてからは吉水の禪房に他のお弟子方と一緒に住んで居たのではないかと想像されます。吉水の禪房は三房に分れて居て西の房(知恩院三門の南西の邊)中の房(二つ岩の庵とも云ひ鐘樓堂の奥、東の房(松下禪房とも云ひ勢至堂の附近)ですが、中の房に上人が住み西の房と東の房とはお弟子達がすんで

居たのです。發心してからは非常に眞面目に念佛にも精進して居たのですが、何うも以前が以前ですからそこにも居つらいのです。さうかと云つて知人があるわけないから町から通つて上人の御教をちよい／＼聴きに來ると云ふ都合にも行きませんので、相模國足柄上郡河村(小田原から北の方二里なり)と云ふところを知る人があるから、そこへ行つて厄介になり老後をおくるより外に方法がなくなりました。その事情は明瞭であります。物がチヨイ／＼なくなつたりするので、どうも彼奴の仕業ではなからうか」と云ふやうな噂がコソコソ耳にも聞へて來るので、何となく後めたくも思はれ、遠い關東へかくれ住まうと云ふ氣にもなつたのではなからうかと思はれます。四郎は「教阿」と云ふ名を貰ひました。もつと永く上人の傍に居てすつか

信 仰 相 談

時のもので、然かも
淨土は謂ゆる涅槃の
世界でありまして涅
槃を證得することに

依つてのみ見得る世界ですから、通常では出
來ない相談です。それで方便として一種の精
神轉換が必要であります。七重に離隔された
部屋に閉ぢこめられた草提希夫人は釋尊を拜
んだ時からもう既に三昧境の人となつて居た
のであります。然しその三昧境はまだ浅い狀
態ですから、客觀的な相對的なものでありま
す。だからその客觀的な淨土感見の場所とし
て「金塚」と云ふものが感ぜられ（その大き
は須彌山のやうに大きい）その金塚の中に色
色の國土が顯現したのであります。だからさ
う云ふ文句になつて居るのです。

第二の「大乘」とは大乗經典ですが、その
時代にはまだ典籍はないのに「讀誦」とはお
かしいと思ひになつたのは無理もありませ
んが、此の經典は韋提希夫人の請に依つたも
のではありますけれども、特に「未來の衆生

の爲に」と念願されて居るところから、後世
「結集」が行はれ經典が出来上るであらうこ
とを豫想して「讀誦」と云ふ言葉が使用され
たと見て見へないこともないでせう。

第三の問題は「法界身とは何ぞや」の問題
が解ればすぐ解決します。然しこれは淨影太
師、天台大師などの考へでは無色無形の理佛
即ち眞如法性のかへ言葉であつて、一切の現
象も皆な法界の體性を具へて居るから衆生心
は則ち佛であると見得られるとするのです
が、之れと異つて善導大師は法界とは所化の
境界即ち衆生界であるから、その化益される
ところ是れ即ち佛の身となるであるところか
ら、直ちに法界身と云ふのであり、且つ心遍
身遍、無碍遍の三義があつて（心遍とは佛心
が衆生の心の中に遍満すること。身遍とは衆

生が佛を観ずれば佛身が衆生の心の中に現け
れること。無碍遍とは佛は身も心も無碍自在
であるから衆生の心の中に心も身も共に遍入
することが出来ること）があつて、佛は一切
衆生の心の中に入り満ちて居るので「法界身」
と云ふのであると解釋して居られます。從つ
て法界身とは衆生への働きそのものに名づけ
たのであり、その次の文句の「一切衆生の心
想の中に入る」とはその説明語であることが
明らかとなります。則ち一切衆生への化益が
そのまゝ衆生の心の中に入ることであり「法
界身」と云ひ得らるゝことであります。そし
てこの一段は例の指方立相の問題となるところ
であり、また理觀に走りすぎると「己心の
彌陀、唯心の淨土」と見る根據となるところ
でもあります。

生活の指導原理は？

(問)

おひまの無いところを申譯ありま
せん。毎日誌上でお教を下さいま

して誠に有り難う御座います。先年御執筆
になられました阿彌陀尊講義や其他のお教

相 信



談 仰

出來ません。然しあなたが此頃自分の心を反省して「人を恨みにくむ心」が深く

に依り法悦の涙にむせんだこともありませんが、近頃は何うしたことか、心が荒んで来て困つて居ります。もう人生の半ばにも達した年齢なのに誠に恥かしい次第です。淨土十二月號の十二箇條問答の先生の御講義を拜見しました時、その間の文句とそのまゝだと思ひました。人を恨みにくむ心が深く困ります。自分でも苦しいですから何うにかしてそれを止めたいと思ひますが、心にこびりついて居て誠に困ります。何卒不動の精神を以て生活が出来るやうに何かよい方法を御教示下さいませうとお願致します。

(新潟縣・燕町・下太田・樋口榮吉)

(答)

大變むづかしい御尋ねで、何かよい方法とは寧ろ私がおきゝしたいくらゐで、とても私から申し上げることは

なつたことにお氣がつかれたことは、むしろそれだけあなたの御心が立派になつたのではありますまいか。私達の心はさう急激に悪化するわけはないのですから、自分自身にさう反省し得られるだけそれだけ心の眼が開けたのではないかと思ひます。眞黒な炭がまだ火がつかずに灰の中にごろごろして居る時はお互ひ様の状態ですから、眞黒であることがむしろ當然であつて、其處に何の反省もいらなわけですが、ひとたび火鉢の中に火のそばに置かれてその片はしに火がつき始めると、黒い部分が馬鹿に氣になつて早く皆んな眞赤な火にしてしまひたい氣持が湧いて來ます。つまり反省が強く起つて來るのであります。私達の心に反省の起る時も丁度かう云つたやうなものではないかと思ひます。

然かもかゝる反省は誠に苦しいものですが、何としましてこのやうな苦しみから抜け出て、カラツと晴れた朗らかな喜びに満ちた生活になりたいものと望むやうになるのも亦た當然なことでありまして、かゝる望みの起ることこそ健全な心の持ち主であることを示すものであります。とは云へ私達は何處までも凡夫でありますから自分の力によりよい生活を打ち建てようとしても中々思ふやうにはならないのです。何處までも如来様のみ恵みにするより外に手段も方法もありません。そこで出来ないながらも如来の御名を呼ぶ念佛唱名にいそしむことにならざるを得ないのであります。それも怠り勝でありますから、如来様への感覺がにぶく自分の改善も遅々として居てご同様に誠に恥しい有様ではあります。外に方法はないやうに思ひます。まづまづ御念佛にお依りになられるのが一番かと存じます。私の考へでは若し私達に念佛以外によい生活を打ち建て得る方法があるとするならば、その人はもうすでに淨土門の人ではなく聖道門の人になつて居るのだと思ひます。



漫 画 協 田 作

すばらしき野暮然

和田かつち

「シーズンでナ
登山客のため山
の人達が考
へました



夏の間
組長さん

川口久

「暑さのきに一ツ怪談を
やりませう」
一同「ア
ル
く」



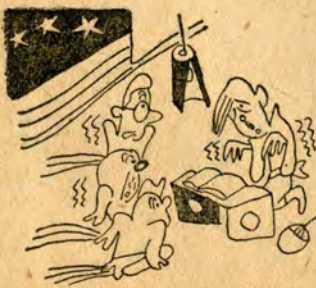
「その時わが潜水艇は
スワコソよき
敵と水中深
くブク
く」

川口久

にわか雨

山崎善一

大臣賞を貰った家
「サ一列にならんで……イテニク」



ぬけめなし

和田

主人「もうめし時ですな

ア

客すかさず

「アノー

外食券

持つて

ますが……」



天界の衣料切符

「坊やしつかり持つてゐな

雲の上ならいいけど

下へ落したら

もどつて来ないか

らね」



あちら

立てれば

「早くしないと

水が解けるぜ」

「チャすまんが、こつちの

豆腐をくづさぬやうに持つてきて

くれ」



いや實に急な坂でネ

「一歩登つた

と思つたら

二歩さがる

まつたの、話、

ほんとに難所だつた

ネ」

「デ、後向きに登つたのか

い」



久 口 川 熱 軍 海 は や 坊

賣込みの藝人 和田かつち

「わしらのやうな世界的の
談心術の大家を舞臺にかけれ
ば……」「そ
サと
かい」
れなら何故サツ
出て行かん

①

アラッ

なわ



②

困るわ



まアッ

久

ドコへ行つた
のせう「守るも
むるも」



ハワイの思ひ出

前アメリカ開教區監督

福田 闡 正

大東亞戦争が勃發した日、わが無敵海軍が米領ハワイに太平洋艦隊を奇襲し、作戦その效を奏し一舉同艦隊主力を全滅させたから、サスガのアメリカもグーの音もでないまでに驚き、全世界の諸列強も唯々驚嘆の吐息をつくのみであつた。それ以來ハワイの名は實に世界の隅々にまで有名となつた。この大戦果は上大元帥陛下の御稜威のお力によることに勿論であるが、又海軍將兵諸士の海軍魂によることと感謝措く能はざる處である。それとともにこれがため戦病死なされた英靈に對しては眞に哀弔の誠を捧げ、傷病者に對しては一日も早く御平癒あらんことを神かけ御祈願する次第である。

一口にハワイはと云つても、それは八つの島から成り立つてゐる。先づ日本から一番近いのがニイハウ島で、二がカワイ島、三がオアフ島でこの島にハワイ第一のホノルル市や要塞や軍港や淨土宗別院がある。四がモロカイ島でこの島は世界第一の癩病院があるところから又の名を癩病島ともいふ。五がラナイ島、六がマウイ島でこの島に肺病々院が山上にあつて宏壯を極めてゐる。七がカホオラエ島、八がハワイ島、この島は八島中最大なる島である。

この八つの島々の中何れの土地を見ても皆悉くラバである。土人の話に大昔ハワイと云ふ島は無かつたが遠いドコかの國に大地震

があつたとき、この八つの島が出来上つたので全島悉くラバの噴き上つたものだと言ふがある。左もありなんと思はれる程土壤がラバであつて長い間に土に化し、そこに何處からか種が飛び來つて木が出来たやうである。近ごろ或種の人々の話によれば、ハワイと日本と地つきであつて日本に地震のあるときはハワイの火山は火を吹く、日本の地震が全くとおさまればハワイの火もおさまると云ふのである。その話も眞に近いやうに思はれる。過去五十餘年間の経験から云ひ出したこの話が眞であるとすれば其邊に何か一脈相通する處があるのかと思はれる。

ハワイの島に人類が棲息するやうになつた

のは紀元六世紀頃からだといふ。轉々數百年を経て紀元一七〇〇年頃に第一世カメハメハ大王がハワイ王を統一し、王朝政治を布いた。かくして第二世第三世第四世第五世を経てハナリロ王となり、次でカラカウア王となり、この王には皇子なく皇女一人だけであつたので非常なる決心を以て明治十四年の頃我日本を訪ね、或種の協約を申入れたが：遂に事成らず、唯日本人の移住其他の協約のみにて終つた。次でリリウオカラニ女王王位に即き王權復興を計られたが、革命勃發しついに退位するに至つた。かくて王朝時代は幕を閉じたのであつた。その結果共和政府が樹立されたものの僅か二三年するうち米國ではマツキンレーが大統領に就任すると共にハワイを米國に合併して終つたのである。

我日本との關係は往昔のことは不明であるが文化元年仙臺の津太夫が布哇を訪れたことや、天保三年、同五年に或は天保十年、同十二年に日本人がハワイを訪ひ、中にも土佐國人中濱萬次郎がハワイに足蹟をのこし、後に

なつて外交上同人が活躍したる事もあつた。弘化四年や嘉永三年等に日本人が來り住んだこともあつた。明治元年には百五十餘人の集團が移民したことがあつた。明治四年には日本とハワイと通商條約が成立して調印を了した。同十八年には官約移民として第一回渡航者として約千名が渡り、同十九年移民條約成立し調印をなし、同二十七年官約移民廢止され自由移民となつた。同三十年には日本人上陸拒絶となり外交問題として賠償金を受け、其他各種の外交問題もあつて結局労働者入國禁止となり今日に及んだのであつた。

ハワイは八島總計六千四百六平方哩ある。丁度日本の四國七千餘平方哩よりは小さく、千島群島六千餘哩よりやゝ大い面積にあたる。又横濱からは三千四百四十五哩の地點に位し、桑港からは二百百哩である。だから日本からハワイまでは十一日間を要し、桑港からは七日間で着くのである。ハワイの氣候は各島平均して華氏六十度以上九十度以下であつて實に凌ぎよい處である。

初め日本人が渡航した頃は百度以上になつたこともあつて堪え難い暑さのこともあつたが日本人が多くなつて溫度が低くなつたのだと云ふ。山も我日本の富士山より高い即ちマウナ・ケア一三八二五尺やマウナ・ロア一三六二五尺のものがある。マウイ島のハレアカラ山は一〇〇三二尺で富士より少し小さいが自動車で頂上まで登ることが出来るやうになつてゐる。こゝには例の有名な銀草がある。一番高いマウナケア山の如きは日本人が多くなつてから頂上に雪を見るやうになつたと云ふことである。

ハワイの總人口は三十八萬四千餘人であつて、その内我日本系人は十七萬六千餘人であるが、更に内譯してアメリカ市民權を有つものが十三萬餘で市民權なきものが約四萬餘である。年と共に日本より來る日本人は其數は減少するばかりであつた。

ホノルはハワイ全島の首府で、ハワイ縣廳を初め總ゆる官衙を具備してゐる。市街もハワイ第一であつて何不自由なきまでにでき

てゐる。學校も幼稚園から小學校、ジュニハイからハイスクール、大學や専門學校までがある。病院や社會事業は至れり盡せりの設備あり、刑務所の如きも頗る自由にできており中にベースボール等のチームまで出来てゐる。軍備としてはホノルルの右の方にダイヤモンドヘッドの要塞があり、左の方には眞珠灣軍港があり、島の中央部にスコフヒルド軍營があつて常に陸軍一ヶ軍團を常備してゐる。飛行場としてはヒンガムは民間飛行場であつて我々は他島に行くのに常に乗つたものである。アメリカ航空會社飛行場は主として陸軍が用ゐ、スコフヒルド飛行場も陸軍用であるし、モカブ飛行場は海軍用である。之等軍備のしてある處もアケツパナシで誰でも視ることは自由である。自由の國もこゝまで来れば徹底しすぎると思ふ位である。

ハワイの宗教は太古は偶像教が多く盛んに淫祠邪教で迷ふものが多かつたと云ふ。第一世カメハメハ大王の頃からしばしば國民に警告を發したが尙熄まず、第三世カ王は斷然嚴

禁したため偶像教初め邪教なるものは地を拂ふやうになつた。一八一〇年頃よりキリスト教が布教され土人の牧師も出来て益々隆盛を極むるに至つた。次でキャソリック教やモルモン教も布教され、非常な勢ひを以て傳道され、キャソリック教の會堂や學校が増加し、モルモン教の中本山の殿堂も出来たのであつた。一八八九年即ち明治二十二年の頃日本人移民増加と共に日本佛敎も渡來し、移民中の神官は神道神社の建立を企て、同じく僧侶は寺院教會の設立に努力し、キリスト教者は教會設置に力を盡した。その結果、一八九四年即ち明治二十七年正式に日本より淨土宗僧侶が渡航して開教し、同三十年西本願寺僧が渡り、續いて神官教師や牧師等渡航して開教し今日に至つてゐる。この中佛敎側を表にすれば

創立	寺院	開教	學校
淨土	一七	二一	一六
西本	三六	五七	一六
曹洞	九	一二	五
明治二十七年			
明治三十年			
明治三十一年			

眞言 大正三年 四 七
日蓮 大正六年 三 五
東本 大正十年 五 八
日本人キリスト教の教會が三十七で三十七人の牧師が盛んに傳道し、此國はキリスト教國であるからキリスト教徒たるべしと強制されたが、宗教的信仰は強制では眞の信者を得ることは出来ない。予の時代にも二十六年間キリスト教會の重役をしてゐたといふものが六人まで淨土宗へ歸入したものがあつた。今日では二教の差は格段の差である。そればかりでなく白人の傳道會社から支給を受ける牧師と信徒の出資による佛徒とは自づから違ふ處があるのは當然である。

モルモン教は一萬五千餘の信徒を有し、オアフ島のライエに本山格の殿堂を建て隠然一大勢力を示してゐるのである。
サンデースクールは神、佛、基三教とも各日曜に開催してゐるが、予がハワイへ赴任後ハワイ縣會に於て一の法案即ち排佛的の案が通過し、正に法律として發布されたから日本

佛教側は大いに驚き、毎日集つて協議を行つた。しかし何うしても資金が不足で、このためクリスト教に對抗できなかった。牧師連は手を打つて喜び合つた。そこで予は決然として自分の案を發表し斷行されたいと申出た。やがてその案が實行されてハワイ縣内約二十萬の(日、支、土人)父兄のサインをとり其筋へ願ひ出でた。其筋では驚いて早速調査したり、研究したが、佛教側の反對は當然の理由があること故、遂に其法律は無効に終らしめた。それと同時に兒童の宗教教育であるサンデースクールがますます盛んとなり、神佛二教のサンデースクールは俄然満員となつたのである。次で青年會も盛大を極め第一回の汎太平洋佛青大會はホノノルに於て開き、日本を初めアメリカ大陸其他支那、泰、佛印、印度等よりも参加し來り大いに氣勢を揚げたのは、サスガの基督教青年會も啞然たる状態であつた。神道としては大神宮、出雲大社、石鐘神社、金比羅神社等の典禮神社の外に金光教、天理教等の教派神道等がある。

今回の大東亞戦争が始まつて以來、日本の宗教家はスパイと見られて先づ第一に抑留されたやうであるが、クリスト教側は免れてゐるやうである。學校の先生を初め何々會の主腦者其他指導階級の連中等悉く抑留されたやうである。誠に氣の毒で何とかしてあげたいと思つても致し方がない。しかしこれ國の爲だ、第一線に居りしものは實戰場以上の第一線だ。自重日本の名をけがさぬやうお祈りする次第である。この戦争は長期にわたることと思ふ、西南太平洋方面や印度洋方面が一段落ついたら、必然にハワイ方面や米本土やアラスカ方面にも擴大されるであらう。明治初年カラカウア王が日本を訪れた時は、アメリカに遠慮して何事もなし得なかつた日本も、今では大手を振つて世界を闊歩する今日此頃である。ハワイ全土はすでに整備され農耕地に自由に降雨さす程度にまで完備されてゐるから頂戴しても差支へないと思はれる。もし左様なことになれば抑留邦人は拘禁の浮目を見た代りに、日本にゐるものよりも

殊勳甲に屬する特權者である。窮屈な苦しみの後に極樂のある如く人知れぬ喜びの嬉しさが燃え出づることと思はれる。その代りクリスト教國だと威張つた人々の影は薄らぎサテは歸結する處を知らぬであらう。此處まで考へて來ると何が何でも勝ち抜かねばならぬことを痛感する。今は武力戦にも經濟戦にも思想戦にも勝つてゐる。總々力戦を以て決戦に導き最々後の一分までも勝ち抜くお互に精進努力しやうではないか。

◎是非御試用下さい！

にんにく粉末
固形にんにく
山田中將湯
神傳五藏湯

特約店を
大募集中です

静岡市上香谷町

神谷昌孝

電話二八六三番

益々元氣旺盛

俳

壇



太田
耳重子選

東京市 清水金鈴子

白蝶のちかりとお日に出合ひけり
評 太陽の光線にふれた時の表現として申し分ないと思ふ。白さ、ちかりと「出合ふ」も皆活躍してゐて無駄がない。

小梅市 平井正念

花吹雪の匂添うて来ぬ
評 多くの俳人は風雅を求めて陳腐な句にしてゐるが此の句の如きは如何にも自然な爲めに新鮮なものを感ずる。

川崎市 藤原政雄

牡丹淨し雪保ちて耀ける
評 雨後の牡丹の清浄さを思はしめる。中七字が雨後の時間的経過をよく示して呉れてゐる。

朝鮮 三浦砂千子

高麗つゝじの花頼りなく咲きにけり
評 深尾重三

麥のびて湖水の春となりけり
和歌山 北垣千里

尺八にまどろむ病友の顔のどか
島根 林良碩

鷺風や新任の教師庭に出で
香川 日向法圓

手車のそここゝにあり麥の秋

大分 淺輪桃舟
衝きあたる壁を照らせる螢かな

東京 三野輪幸節
朱の鳥居今はよこれて麥青む

熊澤秀國
行く人の帽子にふれて柳かな

京都 頼島孝治郎
タンポポの黄に淀城址五月晴

大津病院 大場秀史郎
花アカシヤ先遣の兵旗を振る

五日市 山口勇治
山門の僅かに見えて新樹かな

満洲 鶴岡慈禮
迎春花咲けり良民いさぎよく

比留木虎雄
紅梅の散るかとみれば風出づる

東京 渡邊一念
シクラメン朝の日ざしの窓を占む

北海道 前野賢一
春風や電線軽くたゆたいて

名古屋 堀場典雄
つばくらや整然として京の町

上野恭男
炬燵ほしき日もあり山の五月哉

名古屋 豊津耕順
千雀のまろびさうなり青風

今治 三木光子
鰻田を見下す丘の麥青む

北海道 中村茂舞
語りつゝゆけばしたしや若葉影

岩 國長岡白朝
鰻一つ主寝て讀む新聞に

秋田 鈴木白舟
青空の深さが包ふ若葉かな

満洲 鶴岡慈禮
鯉鱈營庭高く掲げたり

北海道 長谷川初男
初夏の枯枝に空し鰻の籠

茨城 眞木謙太郎
南のたより聞きたや燕

東京 萩原通孝
蝶もつれ何かさゝやき合へるやう

北海道 花田順往
嬉しさは山鷲に曉の鐘

島根 仁阿彌
山越の鷺鳴いて豪華なる

島根 石見千翠
セルを着て子にひかれゆく散歩かな

島根 清淵山
青一面の麥田となりて風わたる

磯原立木直敬
躍動すいのちなりけり若葉道

京都 拜郷賢三
いつか蕘摘みてをりけり小休止

新田 愛染
源傳の小休止兵に青葉かけ

越中 佐伯光安
傘のかさなりつゞき御忌法會

遠藤 博
若芽ふく朝の春日まぶしけれ

東京 細田初枝
今日晴れて夫が首出の花見かな

滋賀 二橋金太夫
陽は斜め菜種の花をかたむけて

滋賀 重野ふみ子
菜の花や同行二人語りゆく

群馬 大輪清
山影に湖暮れて水鏡なく

松本 留洲
春雨に濡れつゝ遊ぶら雀

東京 渡邊一念
騒音の街をはなれて花にあり

丸山 寛四郎
五月雨や木葉かくれはほととぎす

大分 河野善隆
花萼満活けたる節句はなばなし

投稿規定

官製はつき一回二句以内とし住所氏名明記の上「俳壇」欄に送るべし

てに送るべし

會のたより

この名譽！ 本會活動に對し

陸海軍大臣の感謝狀授與

實に三十通の多きに達す

本會は會員各位の御援助によりますます宗教報國の誠をいたし、明るく正しく感謝に生きる職域奉公に邁進すべく努力してゐます。本土は申すまでもなく滿洲國、中華民國にも多數ある會員や或ひは前線で御活躍の各將士、白衣の勇士たちから熱烈な御聲援をいたゞいてゐる賜ものと深謝致します。この本會の活動に對して陸軍大臣から二十九通、海軍大臣から一通それぞれ感謝狀を授與され、また陸軍病院長から四通の謝狀を寄せられ、合計實に三十四通の多きに達してゐます。本會役員等はこの感激にいいよ發奮し、及ばすながら出来るだけの御奉公をさせて頂き、今後とも益々お互が勵みあつて最後まで戦ひ抜くため精進したいと念願してゐます。

「淨土」を機關誌に

正源寺報恩會結成

深川區永代町一ノ一八 正源寺
(住職山田昭禪師) では同寺報恩會を結成し、去る五月二十二日同寺に於てこれが發會式を盛大に舉げた。同報恩會は佛道の修行に

よりお互の心身を練り無我奉公の臣道を實踐し、以て聖業達成に邁進せんとするものであり、毎月十二日に同信同行の士が集つて修養會を催すことゝなつた。尙同會では指導機關の一つとして本會と提携し、毎月一回の定期修養會を除く一ヶ月の他の日には各自が家庭にあつて明るく修養に努めらるゝやう當「淨土」を活用することにし「淨土」を同會機關誌として利用することゝなつた。

感謝狀

今次事業ニ際シ出勤

軍隊附屬ノ爲恤兵品ノ

御寄附ヲ辱クニ感謝ニ

堪ヘス茲ニ深厚ナル

謝意ヲ表ス

昭和十六年十月

陸軍大臣 東條英機

海軍大臣 山本五十六

法政人報印會 啟

大東亞戰爭を勝ち抜くために淨業を重ねることゝなつた。



法語
解説

ただ弘願に隨順するのみ

—— 法然上人法語（その七） ——

中村 辨康

法語

出離の志、到りて深かりしあひだ、もろもろの教法を信じてもろもろの行業を修す。およそ佛教多しといへども詮すところ戒定慧の三學をば過ぎず。いはゆる小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、顯教の戒定慧、密教の戒定慧なり。しかるに我がこの身は戒行に於いて一戒をも持たず、禪定において一も之を得ず、智慧に於いて斷惑證果の正智を得ず。これに依て戒行の大師釋していはいはく、戸羅清淨ならざれば三昧現前せずといへり。

また凡夫の心は物にしたがひて移りやすし。たとふるに猿の如し。まことに散亂して動きやすく一心しづまり

がたし。無漏の正智何によりてか起らんや。もし無漏の智劍なくばいかでか惡業煩惱のきづなを斷たんや。惡業煩惱の絆を斷ぜずば何ぞ生死繫縛の身を解脱することを得んや。悲しき哉。悲しき哉。如何せん。如何せん。

こゝにわが如きは既に戒定慧の三學の器ものにあらず。この三學の外に我が心に相應する法門ありや。我が身に堪へたる修行やあると、よろづの智者に求め、諸の學者にとぶらひしに教ゆる人もなく示す輩もなし。然る間、なげき／＼經藏に入り、悲しみ／＼聖教に向ひて手づから身づからひらき見しに、善導和尚の觀經の疏にいはいはく、一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節久近、念々捨者は名正定之業、願彼佛願故といふ文を見得て

解 說

のち、われら如きの無智の身は偏へにこの文を仰ぎ、専らこの理をたのみて念々不捨の稱名を修して決定往生の業因に備ふべし。たゞ善導の遺教を信するのみにあらず、またあつく彌陀の弘願に順ぜり。願彼佛願故の文深くたましゐに染み心にとゞめたるなり。

(法語抄二五) 二八「微淺擇集」「和語燈錄」

人生を完了するには「智徳並進」とか「知行合一」とか「智目行足」とか言はれて居ますやうに、智慧と實踐とが片跛にならないやう、眼と足とが相應するやうにならなければならぬことは敢へて贅言をなすまでもありませんが、佛教ではそのことを、戒定慧の三増上學とも申して居ます。増上とは修養に依て段々に進歩し向上するからであります。佛道は最上の智慧を最後の目的と致しますが、その慧は戒と定の進みに依つてのみ得られるとして居ります。戒は道德生活の規準であり、定は人生理念の確固不動心のことであります。戒の實踐につれて定もまた段々高くなり、次第に慧を開發しますから、この三は互ひに關聯しつゝ進歩し向上するのであります。また慧は普通に言はれ

る智慧と異り、本當の人生觀世界觀の確立したところの智慧、或はその徹底的理解と云ふか、はつきりしたその諦觀であつて、菩提の内容であります。

菩提にも聲聞の菩提、緣覺の菩提、菩薩の菩提と云ふやうに、目的の相違に依つて名は均しく「菩提」と言つても、内容に格段の相違がありますから、戒定慧にもまたそれぞれ相違があるのであります。則ち小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、大乘の中には顯教の戒定慧、密教の戒定慧などの區別があるのであります。

小乗の戒定慧は『摩訶僧祇律』第二に依ると、増上戒學とは謂ゆる波羅提木叉の五戒八戒十戒等廣略の說なり。

増上意學とは謂ゆる、初禪等の九次第正定なり。(初禪、二禪、三禪、四禪、空處、識處、無所有處、非想非々想處、滅盡定を九次第定と云ふ)

増上慧學とは謂ゆる四眞諦なり。(苦諦、集諦、滅諦、道諦を四諦と云ふ)

と説明して居ります。そしてその目的は『四分律』第五十八に

三學あり。増戒學、増心學、増慧學なり。この三學を學

して須陀洹(預流)、斯陀含(一來阿那含(不還)、阿羅漢果(應供者)を得。此の故に當に勤精進して此の三學を學すべし。

と云つて居りますやうにつまるところは『羅漢』になる爲であります。

次に大乘の戒定慧は

『菩薩地持經』第十に依れば

施戒忍進の四波羅密を戒學、禪波羅密を意學、般若波羅密を慧學とす。

とあつて六波羅密を擧げ、また『大乘義章』第十には

三聚淨戒を戒學、有覺有觀、無覺有觀、無覺無觀を定學、聞思修の三慧を慧學とす。

と云つて居ります。修行の目的は無論『成佛』にあるのであります。

以上は顯教の戒定慧でありますが、この内慧の終極は謂ゆる佛智でありまして、あらゆる思慮分別から超越したものであり、三昧即ち定に依つてのみ證得するものであると言つて居ります。また此の「定」の内容方法は宗派に依つて異つて居ります。例へば天台宗では『止觀』を以て「定」としますし、華嚴宗では『重々無盡法界觀』を以て「定」

としますやうに、同じ大乘教でもそれ／＼の建前から「定」の方法が異なるのであります。

また戒が完全にもたれるなれば定が現はれないから、先づ戒を嚴重に守らなければいけないのですが、大乘觀では三聚淨戒を以て戒として居ります。三聚淨戒とは

一、攝律儀戒(規律正しく)

二、攝善法戒(善いことばかり心掛けて)

三、攝衆生戒(世の爲、人の爲につくす)

の三を言ひます。第一の律儀は梵網菩薩戒經に説かれてある十重戒、四十八輕戒を守ることであります。

また密教の方は「眞言律宗」など特に「律」を重んずるものもありますが、大體戒は「三摩耶(定)戒」と言ふのであり、定は「五相成身觀」と言ふもので、これに依つて遍照金剛の眞慧を獲得するのであつて大體「定」が中心であります。

元來印度人は瞑想好きですから、佛敎の經典中には瞑想觀念を重んずるものが澤山あり、隨つて幾多の人々がこの瞑想を續けて來たけれども、果して眞にその目的を達し得たか何うかは頗る覺束ないのであります。

また支那で發達した禪宗の如きは、坐禪をなすことに依

つて「佛心」を得んとするものであり、師資相次いで一器の水を一器にうつすが如く以心傳心して來たのですが、佛心を得ることは即ち佛になることでなければなりません。然しむかしから「我成佛せり」と名のつた人は一人もないのであります。

元來私達の心は常に間斷なく動いて居るのであります。この「動く」ことがなければ實は生活も出來ないので、すから、動くことが本質であつて動かない心になつたら、むしろ臍抜けか白痴であります。私達は兎角珍らしいものを「尊い」と思ふ癖があります。然し宗教で珍らしい特殊のものを求むるならばそれは普遍的なものでありませんから、人間中心の宗教とは言はれません。

元來動くことが本質である心を動かなくさせて、それで「解脱せり」とする宗教は人間のてではないと思ひます。法然上人ほどの人が「我れ三學の器に非らず、三學の外に我が心に相應する法門ありやと、智者學者に求めしも一人として教ゆるものなかりき」と言つて居られるのです。法然上人の眞剣な質問に對して、その當時の聖道諸宗の人々は一人として返答が出來なかつたのです。誰にしても責任を以ては言へない筈です。つまり聖道門は人間宗教ではない

からです。一種の精神鍛鍊法ではありませうが、理論と實際と一致し得ない憾みがあります。實際上からは道德教であつて、戒定慧なるものはむしろ慧が目的ではなくして戒が目的なのです。定慧の進みに依つて戒生活を一步一步完全ならしめようとするのが、眞の目的であつて、戒の生活の完全こそ求むるところの眞の姿なのではないかとさへ思はれます。セイロン、ビルマ、タイ、ラオス等の南方小乗佛教及び支那の大乗佛教が云ひ合はせたやうに「戒」を以て中心として居るのは、かうした關係を物語るものではないかと推察されます。

昔は聖道門以外には佛教々理を認めて居りませんでしたから、無論淨土門の教理は理解されなかつたのです。智慧第一と推奨された法然上人でさへ、善導大師の『觀經疏』を讀んでも、初めの五返は何と云ふことなしに素通りしてしまひ、六返目になつて「これは」と注意し始め、七返目にいくらか解つたやうではあるが、尙ほ天台宗の教義がひつかまつて居て、心がおちつかず八返目に至つて始めて「一心專念彌陀名號乃至順彼佛願故」の文句があだかも電光の如く眼底を刺戟し、雷霆の如く腦裡を破斥して、茲に他力本願の根本原理が明らかになつたと傳へられて居りま

す。先入主と云ふものは實に恐ろしいものです。この色眼鏡をかけて居ると、眞實のものも眞實には見へないのです。白が赤に見えたり、鼠色に見えたりするのです。即ち「死ぬことのない涅槃」を得るには「生死繫縛」の身を、蟬が脱けかはるやうに解脱しなければなりません（之れを變易生と云ひます）、それには私達の心の中に巢喰つて居る貪慾、瞋悲、愚痴、我慢、疑惑、邪見等の煩惱の根をたち切つてしまはなければならず、それをたち切るには無漏（煩惱のないこと）の正智を得なくてはならず、その無漏の正智正見は散亂粗動の心を動さず暫く無念無想の三昧禪定境に入つて一旦心を停止状態にしなければならぬと云ふ觀念の存する限り、煩惱のあるまゝに、そして散亂麤動の心のまゝに正智正覺無漏涅槃の境界なる「淨土」に往き得ることは絶対に不可能であると思ひ込んで居るのですから、二返や三返讀んだつて淨土門の眞意を汲み取ることは出来なかつたのであります。しかも聖道門なるものが、實踐的には循環論的になつて居て、道德的效果は充分ありますけれども、その目的に到達することはむしろ「出来ない相談」見たやうになつて居るのです。然かもそれを絶対と思ひ込んで居るのですから全く「先入主」と云ふものは恐ろしいものです。淨土門に説く彌陀の弘願を理解するには今

までとは全く別な見方をしないとわからないのです。即ち聖道門は自分を磨いて行く建前をとるのですが、その反對に全く自己の力を否定して、宇宙綜合の大生命に歸一攝受納受されて行くのであり、その宇宙生命を宇宙意志として眺る時、それは「弘願」と云はるべきものであり、しかもその「弘願」は元來本有常住のものであるが、衆生（凡夫）の狀態であつたのを、十劫の昔、初めて法顯されたから、その法顯した人を特に「阿彌陀佛」と言つたのであります。何故に「阿彌陀佛」と云つたかと言へば、最も根本的な無窮なる宇宙生命が開顯されたから、その無窮生命をその人格に代表せしめたのであります。これに就いてはまた申上げる機會がありませんが、私達は宇宙生命に隨順することに依つてのみ本當に生きられるのです。意識するもしないも、好むも好まぬも、宇宙間の一切のものはみな悉く宇宙生命から分けられたもので、實は隨順しなければならぬのですから、むしろ進んで隨順の意識を以て生活するに越したことはないのであります。この阿彌陀佛への隨順を意識することが、即ち淨土門の信仰生活であり、彌陀の弘願に順するものであるのであります。

編輯後記

◇何をするのにも練成のつもりでやりませう。國民として國家として向上を目指す所にいつも中心を置かなくてはなりません。

◇大東亞共榮圈は事實われ／＼の力で背負つてゆくものですから、指導するならそれに相應しい指導者の資格がなくてはなりません。それには先づ自分の身の廻りを省み、少しでも多くお國のためになるやう努めませう。

◇西はマダガスカル島に、西はシドニーに地球の半面を覆ふて無敵皇軍の手がのびてゐます。そして結々たる戦果や鬼神をも泣かせる武勇談が次々に報道されてゐます。◇珊瑚海、海戦で立派に任務を終つて基地に歸る偵察機が、その途中で友軍の大編隊の勇躍敵艦滅亡に向つて飛來するのに出逢ひ、愛機

のタンクには燃料のなくなつてゐるのを百も承知しながら、この編隊が敵を見失つては一大事とばかり基地に歸るのをやめて編隊の先頭に立つて案内をしました。そして敵艦隊のある地點まで案内をしたもののすでに燃料がつかけてゐるので敵に向つて自爆をとげたと報告されてゐます。

◇この偵察機の行動こそ驚愕で皇軍の誇りとするものであります。歸れぬことを知りつゝ自ら進んでその犠牲になつた荒鷲の行動は理窟では解して得ない無上崇高のものであります。

◇何うしたら少しでも多くお國のためになるのか自ら進んで努めなくてはなりません。

◇時態に應じて新しい規則が次々に出来た。しかし、規則が出来たから解決されるのでなく、運用がうまく行つて解決されるのです。自分も他もこの規則にしばりつけ

て運用上に邪魔をしてゐることに気がつかず得々としてゐるが如き事があつてはなりません。

◇吉田総二郎先生は先般來時に御多用中を玉稿を下されました。深謝いたします。

◇梅原眞隆先生に無理をお願いして玉稿を頂きました。厚く御禮申し上げます。

◇本誌戦地創設以来八年もの長い間に亘り御指導下された奥野品子先生が御遷化なされました。謹んで弔意を表します。先生亡き後、戦地は岩野喜久代女史にお願ひ致し御指導をいたゞくこととなりました。女史はすでに奥野野先生の高弟として令名あり、本誌上にもこれまで數回玉句を載せてゐますので讀者にはお馴染みの方です。従つて奥野野先生の後継者として戦地の御指導を願ふに最も適任者を得たものと信じ感謝してゐます。

(村瀬)

淨土 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可昭和七年六月十日印刷
昭和七年七月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號印刷部
編輯兼發行人 眞野正順東京市牛込區西町七(東京)
印刷所 赤尾光雄配給元
東京市神田區淡路町二ノ九日本出版配給株式會社
發行所 法然上人禮仰會東京市芝區芝公園明照會館内
郵政東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢

(送料共)

一ヶ年

腦の病・神經系統諸症・神經痛
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

綜合的優秀藥

光明丸

主治効能

腦神經系統諸病、神經病、腦神經衰弱、不眠症
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺（ヒキ）、兒麻痺（シケ）、腦
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
神經性（耳病）、神經性（鼻病）、記憶力減退、
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一
切、神經性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

價 藥			
六	十	廿	卅
日	日	日	日
分	分	分	分
貳	參	五	七
圓	圓	圓	圓

全國有名藥
店・一流百
貨店ニアリ
品切ノ節ハ
直接本舖へ
御注文下サ
イ

試供藥と
説明書を
進呈

謹製領藥元 願 成 閣

京都伏見いなり山

關西代理店 大阪 合資會社丹平商會分店
關東代理店 東京 株式會社丹平商會支店

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年六月七日印刷納本・昭和十七年七月一日發行

淨 土 第八卷第七號

（傳）定價金十二錢（送料）
外埠定價金十三錢